

# INTERCULTURE

関西学院千里国際中等部・高等部 Senri International School of Kwansei Gakuin (SIS) | 関西学院大阪インターナショナルスクール Osaka International School of Kwansei Gakuin (OIS)  
〒562-0032大阪府箕面市小野原西4-4-16 | 4-4-16 Onohara-nishi, Minoh-shi, Osaka-fu, 562-0032 JAPAN | TEL 072-727-5050 | FAX 072-727-5055 | URL <http://www.senri.ed.jp>

好天に恵まれた Sports Day

オーストラリア Home Stay

Summer Camp

東日本支援センター活動報告

英検1級に2名合格

FALL 2011 No.132



2011/10/17 中庭オープンセレモニー (撮影: 斎藤数)

関西学院千里国際キャンパスは、帰国生徒を中心に一般日本人生徒や日本の教育を希望する外国人生徒も受け入れて日本の普通教育を行う関西学院千里国際中等部・高等部 Senri International School of Kwansei Gakuin (SIS) と、4歳から18歳までの主に外国人児童生徒を対象とする関西学院大阪インターナショナルスクール Osaka International School of Kwansei Gakuin (OIS) とを、同一敷地・校舎内に併設しています。両校は一部の授業や学校行事・クラブ活動・生徒会活動等を合同で行っています。チームスポーツはこの2校で1チームを編成しており、国内外のインターナショナルスクール、日本の中学・高校との交流試合等に参加しています。このため、校内ではインターナショナルスクールの学校系統に合わせて、6年生～8年生(日本の小学6年生～中学3年生春学期)をミドルスクール(MS)、9年生～12年生(日本の中学3年生秋学期～高校3年生)をハイスクール(HS)と呼んでいます。

# 国際的に通用する力とは

～「大阪府学力・学習状況調査」・「TOEFL-iBT」などから思うこと～

井藤真由美  
SIS教頭

学力とは何ぞや、ということについて、また、国際的に通用する生徒を育てる教育とは？ということについて考えることの多い今日この頃です。

## ●「大阪府学力・学習状況調査」

6月14日に実施されたこの調査に本校の9年生も参加しました。その結果はすでにホームページでも公表されているとおりです。大阪府は、今年初めてこのような府独自の調査を実施しました。2007年以来全国版の調査で3年連続下から3位という結果にショックを受け、それ以降に実施した様々な教育改革の一環として、今年度初めて実施の運びとなったようです。大阪府内の公立中学のすべてが参加し、私立校は任意参加でしたが、学校数でいうと約三分の二の私立中学校が参加しました。

「国語」と「数学」に、それぞれA問題とB問題があるのは、全国版の調査と同じです。A問題は、以下の内容を問う問題。つまり基礎知識。

・調査する学年の前の学年までの内容で、身につけておかなければ後の学年の学習内容に影響を及ぼす内容

・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能

それに対して、B問題は、以下の内容を問う問題です。つまり応用力。

・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力

・様々な課題解決のために構想を立て、実

践し、評価・改善する力

そして、大阪府の調査では全国版にはなかった「英語」のテストもありました。

では、この5種類のテストの結果(ホームページでも掲載しているもの)が<グラフ1>です。

大阪府全体の平均点との差が、丸のなかに表示されています。これを見ると、SISの生徒たちは、国語・数学共にAよりもB問題に強い。つまり、知識を習得しているだけではなく、それを元に、考え、自分の意見を述べ、問題解決につなげる力に秀でているということです。SISでの日ごろの教育の成果が現れていることをうれしく思います。

英語は、期待通り大阪府の平均を大きく上回りました。本校ではs, i, h, h+ という4つのレベルに分かれて英語の授業をおこなっていますので、それぞれのレベルごとの平均点も計算してみました。主に英語圏からの帰国生のクラスであるi, h, h+の間にはほとんど差がありませんでしたので、この三つのレベルをひとつにまとめ、S*i*/h/h+と大阪府平均を比べたのが<グラフ2>です。(s=43人 i/h/h+=22人)

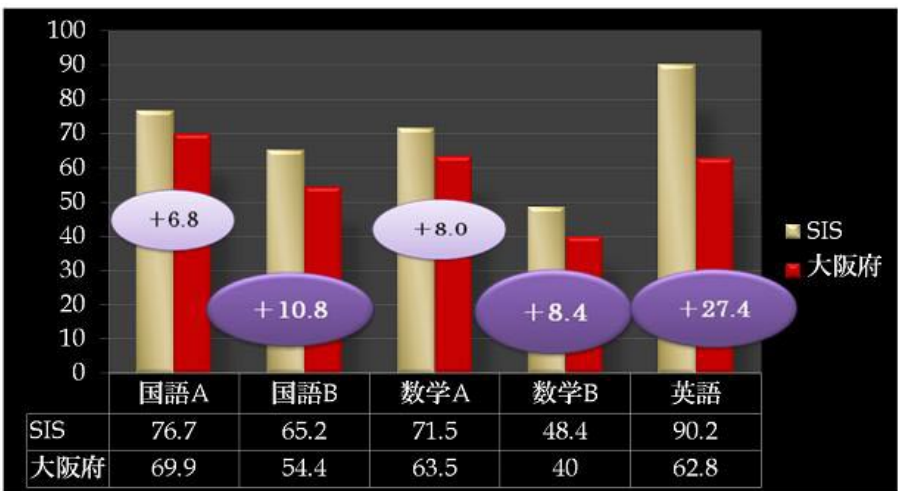
Sレベルの生徒たちと、i/h/h+の生徒たちとの平均点の差はわずか2.5ポイントです。Sレベルでも満点を取っていた生徒が複数いました。さて英語ネイティブレベルの生徒たちで満点を取れなかった人はどのような問題をまちがえたのだろうか？と、気になります。英語科教員にも協力をお願いします



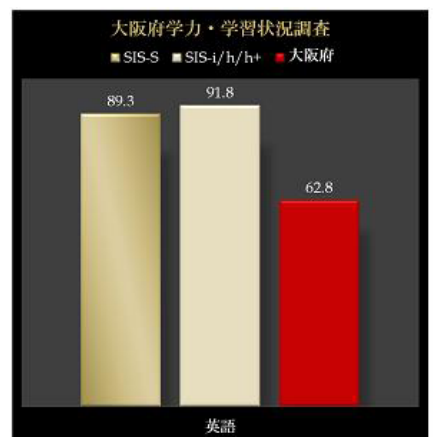
て少し分析してみたのですが、誤答の原因として考えられるのは、日本語から英語に訳すときに「出身」の意味がわからなかったのか、とか、「あなたは週に何日〇〇しますか」を訳すのに How many days a week do you～?ではなく、How many times a week do you～?と書いて減点されたのではないかと(こちらのほうがネイティブ感覚ではより自然な英語であるが)とか、表から情報を読み取って答える問題があるのですが、ここでの誤答の要因は英語力の問題とは無関係なのではないか、などです。というわけで、残念ながら、この大阪府の英語テストの結果だけではSIS生徒の英語力を本当の意味で見ることができません。生徒たちが日常受けている英語の授業の中身と、このテストで問われる英語の質はあまりにも違うものでした。(i/h/h+のクラスはもちろんですが、sクラスの生徒にとってもそうです) そこで次に楽しみにしているのが、今高校生たちが受けているTOEFL-iBTです。

## ●「TOEFL-iBT」

高校生とその保護者の皆様にはすでに詳細をお伝えしていますが、これも大阪府



<グラフ1>



<グラフ2>

が今年から始めた新しい試みにのって実施しているものです。高校生が質の高い実践的な英語力をつけることを奨励する新しいプログラムとして、国際的に認められているTOEFL iBTの受験を勧め、その結果を見て「頑張っている学校」を資金面で支援するというものです。本校がこれに参加することを決めた理由は以下のとおりです。SISでは高校生251人のうち、194人が受験すると表明してくれています。

▶ TOEFL-iBTは、グローバルスタンダードでの英語力を見るテストであり、同時に、グローバルスタンダードの一般学力をも試されるテストである。

高校生たちには、SISの生徒として以下の点に自信を持って受験をして欲しいと伝えました。

SISの英語の授業で、リスニング、リーディング、ライティング、スピーキングの4つの技能を偏りなく身につけている。実践的な英語教材を用いて行う英語の授業、そしてバイリンガルなSOIS環境で、生きた英語を身につけている。コンピューターを使いこなす技術も早いうちから身につけている。そして・・・TOEFLで試されるのは英語力だけではありません。いわゆる日本の受験英語とは一線を画するスタイルのテストで、問題解決能力・決定・意見表明・創造性などを同時に高いレベルで問われます。SIS高校生は、SISでの教育で、英語だけではなくすべての授業を通じてこのような力を身につけています。(校内配布物より抜粋)

▶ なによりも、受験する生徒個人へのメリットが大きい。

世界で通用する英語力・思考力を試すチャンス！世界中の130カ国、6000以上の大学で受験資格として使われています。日本でも、多くの大学で、受験時の資料や資格として大いに役に立ちます。大学での英語学習の準備ともなる。交換留学や、奨学金プログラムにも役に立つ場合があります。SISでは、単位認定されます。(61点以

上で2単位)(校内配布物より抜粋)しかも、受験料は学校負担です。

▶ 学校にとってもメリットが大きい。

SISでのグローバルスタンダードを意識した教育の強さを証明することができるうえ、よい結果を出すことができれば大阪府からの助成金が出るため、それによってSISの教育の質をさらに向上させることができます。

このように書いたことで、受験している高校生にプレッシャーを与えるつもりはありません。日ごろの実力に自信を持ってのぞんでもらいたいと思うのみです。

なお、英語科では、主任のMs.Nambaが中心となって、TOEFL-iBTワークショップを開いています。これまで9月と10月に二度実施し、リスニング、リーディング、ライティング、スピーキングの4つのセクションに分けて実際の問題とその準備対策を紹介しています。参加生徒達の姿勢はとて熱く、活気あふれるワークショップとなっています。11月にも三度目のワークショップが予定されていますので、今から受験予定の人はぜひ参加してください。

●世界のなかの日本

さて、最初のほうでも触れましたが、大阪府は日本の都道府県の下から三位という結果にショックを受けたわけですが、日本国内のスタンダードでどんぐりの背比べ(失礼！)をしている場合ではないと言いたくなる現実があります。TOEFL-iBTの日本人受験者の最新の平均点は65点です(満点は120点)。これは受験生のいるアジア30カ国中、なんと下から二番目です。日本と同じく英語を公用語とはしていないお隣

の国、韓国・中国ともに平均点は78点です。

また、PISAやTIMSSという国際学力テストがありますが(文部科学省のホームページより:http://www.mext.go.jp/a\_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/07032813.htm)これを見てみると15歳の子供の学力の、世界の中での日本の位置づけの変化がよくわかります。ちなみに、PISAは日本のテストでいうところのB問題以上にBタイプなテストで、考える力や問題解決能力に加え、思考プロセスやモチベーションなども問われるものです。

2000年・2003年・2006年・2009年の国際比較での順位のみを表したものが表1>です。

2000年から2006年にかけてすべての分野で下降を続けていたのが、2009年では少し快復しています。しかし「数学に強い日本」といわれていたのも、もう過去のことになってしまっているようですね。日本全体の教育は、まだまだ知識偏重から抜け出せないというのが現状でしょうか。それともゆとり教育のせいでしょうか。ちなみに、2009年の国際比較の上位国は表2>のとおりです(65カ国・地域が参加)。順位とか点数とかの数字に振り回されてはいけないとは思いますが、どんなタイプの質問であれ、筆記試験は筆記試験。筆記では測れない能力(学力)もあるはずである、とも思いますが…。

アジアでは、シンガポール、韓国、中国などで、グローバルスタンダードを意識した大きな教育改革が行われています。夏(次ページ★に続く)

	読解力	数学的リテラシー	科学的リテラシー
2000年	8位	1位	2位
2003年	14位	6位	2位
2006年	15位	10位	6位
2009年	8位	9位	5位

<表1>

	読解力	得点	数学的リテラシー	得点	科学的リテラシー	得点
①	上海	556	上海	600	上海	575
②	韓国	539	シンガポール	562	フィンランド	554
③	フィンランド	536	香港	555	香港	549
④	香港	533	韓国	546	シンガポール	542
⑤	シンガポール	526	台湾	543	日本	539
⑥	カナダ	524	フィンランド	541	韓国	538
⑦	ニュージーランド	521	リヒテンシュタイン	536	ニュージーランド	532
⑧	日本	520	スイス	534	カナダ	529
⑨	オーストラリア	515	日本	529	エストニア	528

<表2>

# The two-schools and the future of education in Japan

John Searle

OIS Head



It is becoming clear that there is growing concern among policy makers in Japan that the country needs to reconsider what students learn and acquire from

their middle and high school education.

Japanese companies are struggling to find suitably skilled recruits in a world where even local firms are becoming part of the increasingly globalized economy. According to statistics shared at a recent meeting I attended with other heads in Nagoya, in 2011 Panasonic, one of Japan's leading electronics companies, increased their international hiring by 33%, while their hiring of domestic employees dropped by nearly the same amount. The developing view appears to be that to provide a suitably skilled workforce for Japan to compete in the global economy, schools and universities will need to develop graduates who are assertive, prob-

lem solvers, cooperative, leaders, critical thinkers, seeking challenges, linguists, appreciative of other cultures, with a well rounded education and a sense of a Japanese identity.

These criteria were developed by a Ministry of Education subcommittee called the Global Human Resource council. This council, in turn, has drawn its findings from the reported needs of Japanese companies including Rakuten, Uniqlo, Panasonic and Toyota. These companies are seen as either future or current global players and important to Japan's future economic prosperity. The findings of the committee have led to a more urgent search for a curriculum framework that will develop these outcomes.

An area of possible interest for the Ministry of Education is the International Baccalaureate programs. IB schools utilizing the IB curricula through skilled and innovative teachers, in schools that are focused on the task, are developing exactly these kinds of students. After years of mild interest in the IB, the ministry is now taking a serious look at what aspects of the IB philosophy and curricu-

lum can be used in Japan.

Parents may think the long list of essential skills identified by Japan's leading companies looks familiar. OIS' learner profile, that list of qualities, skills and values which is the aim of the education provided at OIS, bears a remarkable similarity to this picture painted by the Ministry of Education subcommittee of the ideal internationally-minded Japanese graduate.

These discussions last week helped to confirm some thoughts. Firstly, the fact that the Ministry of Education has independently developed from their own research, a list of skills and qualities that mirrors our own expected student learner profile adds considerable support to our work. Secondly, many of what we might once have termed 'soft skills', qualities such as 'cooperation' and 'teamwork' that we admire in people, but never thought of as absolutely necessary, are becoming critical attributes in today's interconnected world.

SOIS can play a huge part in this future picture for Japan and the world with the experience we have accumulated in the past twenty years.

(★前ページの続き)

休み中に大阪府主催の研修会で、知事に同行して韓国に視察に行った方の報告を聞く機会がありました。先日は東京で開かれた「グローバル社会の学校教育」というシンポジウムで、中国の教育改革についての詳しい説明を聞くことができました。新聞等の情報である程度の知識は持っていたつもりでしたが、具体的で詳細な報告を聞き、正直、ショッキングと感じるくらい驚きました。国を挙げての大きな改革が実現しているという事実、そしてその改革の目指すところは、まさに「グローバルスタンダード」。IBの理念などもしっかりと取り入れられています。日本も、国を挙げて国際的な標準を意識した教育改革に本気で取り組む時が来ていることは間違いないようです。上記の東京でのシンポジウムで、毎年ダ

ボス会議(世界経済フォーラム)に参加している方に聞いた話ですが、以前より日本人の発言が少ないということが言われていましたが、今年は世界中の企業が集まって次世代リーダーを開発するという企画があったそうで、そこでも日本人の人材が足りなく、日本は「人材の後進国」というレッテルを貼られたということです。悲しい事実。

さて、なんだか話が別世界に行ってしまったようですが、SISでは、今までも、そしてこれからも「世界」に照準を定めてOISと共に、Informed, caring, creative individuals contributing to a global communityを育てていきます。これまでの実績に自信を持ちつつ、しかし、井の中の蛙になることなく、今後も改革・成長を目指していきたいです。これもすでにHPに掲載していることで

すが、眞砂校長が、文部科学省の中央教育審議会の委員に任命されました。今後の高等学校の在り方に関する意見聴取をまとめていくための審議会で、今年(11月)から一年半ほどの期間、日本の高校教育をこれからどのように改革していくべきかについて話し合い答申を出します。SISがOISとともにやってきた教育が高く評価され、私たちの20年間の経験が日本の教育を変えていくのに役立つということをととても誇りに思います。

10月17日にオープンした中庭の芝生で生徒たちが教科書を広げて勉強したり、輪になって議論したりしています。素敵な光景です。



恒例のSOIS運動会は爽やかな秋晴れの下、10月29日(土)に開催されました。OIS幼小部の運動会の後、ミドルスクールが4つのハウス対抗で、ハイスクールは学年対抗で競い合いました。午前にはドッジボール、インターセプター、フリスビーなどの競技が体育館とフィールドで行われました。昼食後のパフォーマンスはフィールドで行われ、各学年が練習の成果を発揮し、個性的なダンスやチームワークの良さに歓声が沸きました。午後は玉入れ、障害物競走、むかで競争、綱引き、リレーで盛り上がりました。

# Sports Day

October 29





### Sports Day

- 8:45 小学部運動会
- 10:45 小学部閉会式、中高等部閉会式
- 11:00 午前の競技
- MS：ドッジボール/インターセプター
- HS：ドッジボール/アルティメットフリスビー
- 12:45 ランチタイム
- 13:15 パフォーマンス
- 14:00 午後の競技
- 1) 玉入れ
- 2) 障害物競走
- 3) ムカデレース
- 4) 綱引き
- 5) リレー
- A スウェーデンリレー
- B 女子学年対抗リレー
- C 男子学年対抗リレー
- 16:00 閉会式・掃除



# オーストラリアホームステイ 2011

見島直子

国語科

今年のオーストラリアホームステイプログラムの参加者は、総勢15名でした。

私自身は、引率教員として同行するのはこれで4回目です。プログラムの内容そのものは、もう何年も変わっていませんが、生徒はそのたびごとに自分にしか出来ないユニークな3週間を体験します。特に、親元を離れて、他人の(しかも外国の!)家庭で暮らすのは初めてという生徒がほとんどです。わずか3週間とはいえ、それぞれのドラマがあり、それぞれに忘れがたい時間を過ごしました。現地のホストファミリーにとっても、日本から来た生徒を3週間も預かるのは大変なこと。生徒を家族の一員として受け入れ、距離を縮めるためにさまざまな努力をしてくださる様子を間近で見ていると、やはり頭が下がりました。人と人が「出会う」、つまり深く関わるといことはかけがえのない体験なのだ、この夏も改めて感じることができました。

以下は、生徒たちがプログラム終了直後に書いた手記からの抜粋です。彼らがどんなことを考え、何を感じたか、その一端でもお伝えできればと思います。

□アボリジニの授業を通して、オーストラリアの人たちは自分たちのことだけでなく、先住民であるアボリジニの人々や文化を尊重して、将来を背負う子供たちにその素晴らしさを伝え続けていました。私は、オーストラリア人の、いろいろな人種を尊重して受け入れる優しさをまねたいと思いました。そのような文化が、多国籍民族国家であるオーストラリアを平和に保つ秘訣なんだと思いました。

□思い返せば、はじめの一週間はつらかったけど、その1週間があったから、残りの2週間を楽しむことができたと思うし、人の優しさを知ることができたと思います。ホストファミリーの優しさ、友だちが自分にとってとても大切に安心できる存在であることに気づきました。

□このプログラムに参加して、今まで自分でも知らなかった自分を見つけることができました。最初は自分から何もはっきり言えなかったし、Yes/Noも言えなかったのに、だんだんと言えるようになり、自分から何がしたいかを相手に伝えることが出来るようになりました。

□週末になると、SISの友だちや、保護者代わりだった眞砂先生に会えず、とても辛く、友だちの大切さや家族の有り難味に気づきました。

□このプログラムから学んだことは「積極的にになると自分のプラスになる」ということです。今まで自分からやるといことは少なかったのですが、今回は、自分からやりたいと言うようにがんばりました。あまり話をしたことがない人でも、自分からがんばって話しかけると案外仲良くなれました。

□英語でなんと言うのかわからなくて言うのをあきらめたり、バディーについて行くばかりで何もできない自分がむしくなる時もありました。でもみんなつらいことがあるし、自分だけじゃないと思うと心強くなり乗り越えることができました。

□このプログラムを通じて一番変わったのは、自信がついたことです。たくさん喋ったことで、「文法が違っても英語なんて言葉なんだから通じればいいや」ということに気づきました。ほんの少し



英語力もついたと思います。向こうでたくさん話しかけられたことで、シャイなところも直さないといけないと気づいたし、本当にたくさんの方に気づかされました。

□日本の家族の大切さがわかりました。はじめのうち(ホストファミリーには)何を頼むにも勇気が必要で、いつも躊躇なくものが頼めて、更にそれを聞いてくれる家族がそばにいることのありがたさが今回の経験でわかったことのひとつです。

□私は今回のホームステイで、自分が意外と精神的に強い方だとわかり驚きました。また、思いのほか人見知りせずすんだので安心しました。人に話しかける度胸がついたなど思えるようになりました。

□一番難しいけれど大切だと思ったことは、自分の英語が正しいのか正しくないのかを考えすぎて、結局自分の伝えたいことが伝えられなくなってしまうようにすることです。

□オーストラリアの文化は日本とはこんなに違うと実感して、他にもいろいろな国に行ってみたくなりました。

□最初の1週間は環境になじめなかったり、英語が聞き取れなかったりしたが、後は身体も慣れてきてホストファミリーにもとても大切にしてもらって、オーストラリアは大好きな場所になった。今すぐにでも帰りたいくらいだ。日本に帰ってからオーストラリアに帰りたいと何度も言ったらお母さんに怒られた。

□文法などが間違っているけど、頑張って相手に話すところとちゃんと伝わるのがわかりました。理解してもらえないときもありましたが、辞書で調べて頑張ってあきらめなかった結果、わかってもらえた時の嬉しさは今でも覚えています。また、びっくりしたのが、就寝時間です。日本では11時半にベッドに入っている私が、オーストラリアでは毎日9時に寝ていました。そのせいか、毎日がとても充実しているように感じました。

□(優しくしてくれたホストファミリーに対して)英語で気持ちを言えなくて悔しかったです。これからの英語学習の目的が持てました。いつか英語が話せるようになって、お世話になった人たちに言えなかった分の感謝を伝えたいと思います。

□このプログラムを通して、初めて他の国に友だちが出来、第二の家族ができました。これは私にとって一生残る大切な宝物です。

みんなの心の中に何かしらの種が蒔かれたことでしょう。それが芽吹き、実をつける日のくることを!!

# Summer Camp 2011

## 里山・フィールドレンジャー キャンプ

木下 賢

SIS12年

今年もまた暑い時期がやってきた。サマーキャンプの中で一番きついといわれているフィールドレンジャー。「自分を変えたい。」「リーダーシップ性を養いたい。」「去年の感動をもう一度」など、それぞれがそれぞれの目標を持ってここにきました。今年には37人。去年よりも9人も増え、多忙の一か月がスタートしました。

フィールドレンジャーとは自分たちの手で、7年生の笑顔のために、三日間のキャンプを一か月間かけて作り上げるキャンプです。「すべては7年生の笑顔のために」という大きな目標を掲げ、また今年には「絆」というテーマも加えキャンプを作っていました。よく「絆は大事なことだ。」って耳にするけれど、なぜ絆は大事なのか。絆ってなんなのか。簡単そうで難しい「絆」というテーマを、私たちはあえて選びこの一か月間37人力を合わせて頑張ってきました。場所は大阪と和歌山の境にある紀泉わいわい村。ここでは昔の世界にタイムスリップし、風呂は五右衛門風呂。ご飯はかまどで作る。近くには小川が流れ、田んぼもあるYMCAが運営する「里山自然学校」です。ここで私たちレンジャーは3泊4日過ごします。

そんな中で今年、私はキャンプディレクター(村長)を任せられ、いろんなことを考えさせられるキャンプとなりました。例年よりも多い人数をどのようにして一つのチームとして築き上げることが出来るのか。みんなの輪の中に入れてない人はいないか。沢山ありそうでそんなないミーティングをどう使うのか、などに課せられた仕事は山のようにあり、この一か月間、一日の半分以上を里山の時間にあてる日々が続きました。なかなかすべてうまくいかず、最後の最後まで予定変更したり、皆を一つにまとめるのに四苦八苦しましたが、最後は7年生、そして私たちも笑顔でサマーキャンプを終えることが出来ました。

キャンプを構成する様々な

役職がある中、今年は新しく本部と各ハウスをつなぐハウスマスターという役職も増え、連絡の漏れがないように、迅速な対応をよりできるようになり万全な形でキャンプ当日を迎えることが出来ました。

このキャンプは7年生のためのものなので、私たちは一日前にキャンプ場に入り3日間の最終確認と準備をします。火の熾し方や料理の作り方、各家の装飾などやるべきことは盛りだくさん。いつ7年生が来て大丈夫な体制を整えました。

2日目。いよいよ7年生たちがやってきます。やるべきことはやってきた。あとは思いつきり楽しむだけ。みんなワクワクドキドキしながら7年生の到着を待ちました。天候は曇り時々雨。あまりいいコンディションとは言えなかったけれど、オリエンテーションの時には雨も上がり暖かい日が差し込み、大きな予定変更もなくスムーズに終わりました。この日のメイン行事は肝試し。キャンプ場のすべての電気を消し、各ファミリー懐中電灯一個ずつ持ちキャンプ場を一周しました。キャンプ場なのでお化け役の人たちは蚊に何か所も刺されながらも一時間半も脅かしたかきがあり、7年生の皆は最高の夜を過ごせたみたいでした。7年生の就寝時間は10時。しかし、私たちレンジャーの夜はこれで終わりではありません。10時以降は次の日の予定の確認や一日の反省会を行い、皆瞼が落ちそうになりながらもしっかり確認しシャワーを浴び、12時完全就寝。

里山キャンプの中で最も過酷といわれる3日目。私たちレンジャーは5時30分ぐら

いに起床。7年生も朝ごはんを作らなくてはいけなかったので6時に起床。しかし、キャンパーたちは元気いっぱい！私たちレンジャーよりも早く起床し朝から走りまわっていました。朝はみんなの頭を起こすため、朝プロを行うのですが、今年には7年生も一緒にキャンプを作ろうということで、朝プロはすべて7年生に任せました。今年には7年生はしっかりしていたので時間変更もなく順調にスケジュールをこなすことが出来ました。朝食作りも、ごはんづくり二回目とあってどの家も大きな問題もなく、おいしい料理をたくさん食べることが出来ました。さあ〜しっかり栄養つけた後は思いっきり遊ぶぞ。午前中は水鉄砲作りグループと昼食作りグループに分かれ太陽が私たちをまぶしく照らす中、汗水流しながら遊んだり作ったりしました。今年には7年生のお父さん、お母さんもキャンプ場に駆けつけてくださり、私たちのご飯を炊いてくださいました。お昼ごはんは作りすぎてしまったけれど、どの料理もとてもおいしくいただきました。午後は水鉄砲つくりとおやつ作りのグループに分かれ、7年生のお父さん、お母さんも自分たちの子供と一緒に体験する姿も多く見かけ、午後も午前と引けを取らず盛り上がりました。この日の総人数は120人超え。大人数にもかかわらず、私たちレンジャーの結束は固く、急な予定変更に対応でき、大きな問題もなく昼プロを終えることが出来ました。夕食後、キャンプの醍醐味であるキャンプファイヤーの時間。しかし、突然のスクールに見舞われキャンプファイヤーは延期。雨がやむのを



待ちました。突然の事でしたけど、私たちレンジャーは冷静に雨のプログラムを実施。雨なんかには負けないぐらい屋内で大盛り上がりでした。そして、みんなの願いが届いたのか、雨はやみキャンプファイヤーを実行しました。今年は遠隔操作で火をつけるというマジックファイヤーという手法を使い、7年生の興奮は最高潮に達しましたが、又雨が……。火を長時間見ることはできなかつたけれど、きっと7年生の心にはしっかり焼き付いてくれていることでしょう。びしょびしょになりながらも3日目は終了。7年生は就寝。私たちはミーティングを開き、キャンプ最後の夜なので、みんなで本部でカップラーメンやお菓子などを食べ、4日目に備え就寝。疲れがピークに達していた私たちは寝袋に入るとすぐ眠ってしまいました。

4日目。キャンプ最終日です。私たちは学校に戻らなくてはなりません。すべての備品を揃え、整理し、7年生の方では里山運動会が行われ、この4日間で築き上げたファミリーの絆を見せつけあいました。そうこうしているとあっという間に退村式の時間がやってきました。涙ありの式となり、全員この4日間の思い出を振り返りました。全員一緒にバスに乗りキャンプ場を後に。7年生を駅まで送り返したあとも私たちレンジャーの仕事は続きます。すべての備品を学校の倉庫にきれいに整理する仕事。準備期間も含め一ヶ月間を振り返りながら笑いあり、涙ありの片づけをして私たちのキャンプは幕を下ろしました。

このキャンプは私にとって本当に意味のあるものでした。たった37人だけだとされど37人。人をまとめるということの難しさをこのキャンプで痛感し、私の力となりました。そして今回テーマとしてあげた「絆」。お互いがお互いを信じあったからこそ絆が生まれ、数々あった大きな壁もみんなで作りました。また、駅で7年生たちとさよならしたとき、みんな笑顔で手を振ってありがとう、といって帰っていきました。今までの時間は無駄ではなく、途中でくじけそうにもなったけれど、あきらめずに最後までがんばってよかったです。

最後になりましたが、このキャンプを支えてくださった先生方、キャンプ場のスタッフの方々。主役である7年生のみんな。そしてなんといってもレンジャーのみんな。本当にありがとうございました。そしてお疲れ様でした。一生忘れることのない思い出を作ることができました。今回得た教訓をこれからの人生に役立てていきたいと思いません。来年は今年よりもっと大きな感動と笑

顔を作るキャンプを作ってください。

## 海洋キャンプ

彦坂のぼる  
英語科

今年で10周年を迎えた海洋キャンプは、例年どおり徳島県阿南市にあるYMCAの施設にて行われました。天候にも概して恵まれ、元気に楽しい4日間を過ごしました。参加者は8年生から12年生の55名、引率は計画の段階から携わった相良の他、牧、野島、彦坂です。5学年が一堂に会するこのキャンプは、年を追うごとに成長してゆく生徒の様子がうかがえる、感慨深いものでした。

海洋キャンプには、高校生が中学生のために企画運営をする、というリーダーシップを養成する趣旨も多分に含まれています。高校生は事前に練り上げた計画を元に、時には臨機応変に対応しながらプログラムを遂行し、また、中学生の安全の確保や場を盛り上げる配慮も見られ、その役割を果たしていました。参加する側の中学生は、高校生のこうしたリーダーシップに安心して思う存分楽しんでいるようでしたが、一方で自己への責任感をしっかりと持って行動し、指定された時間と場所に必ず集まり、食事の盛り付けや配膳にも率先して参加し、工夫して行っていました。また、互いへのリスペクトの面でも助け合いながら楽しく過ごす姿が見られました。

自らの責任を果たし、5リスペクトを守り、思い思いに楽しむことができた今回のキャンプをきっかけに、SIS生として更に立派に成長してくれればと思います。

次に、サブリーダー長として企画運営に携わった12年生、井上美優さんの報告をご紹介します。

私たちは7月2日から5日まで阿南海洋国際センターに行きました。キャンプの日くるまで10年生からのリーダーたちで5リスペクトに基づいて楽しいキャンプを過ごせるようにミーティングを重ねていきました。1日目は到着してすぐに昼食をとり、カッター訓練をしました。カッター訓練ではみんなチームに分かれ力を合わせてすぐ近くにある離れ島にいきました。初めてのカッター訓練で、思っていたよりすごい体力を使いましたが1人一人違うポジションにつき、声をあわせてカッターをこいでいきました。夜のアクティビティではクイズやジェスチャーゲームなどをして盛り上がりました。次の日はヨット訓練のはずでしたが風が強



く中止となりました。なので1人1人カヤックにのって島の周辺をこいでいきました。思っていたよりも難しくカヤックから落ちている子も少なくなかったです。夕食の野外料理ではみんなでカレーを作り、おいしく食べました。夜の肝試しでは、先生や生徒がおぼけ役をし、みんな怖がっていて大成功でした。その後、花火をして夏だなんていう実感をしました。次の日はカッターで無人島にいき海で泳いだり、スイカ割りを楽しみました。夜はキャンプファイヤーをしてマシュマロを食べたり劇をしたりなど楽しかったです。最後の日にはストーンペインティングとカヤックに分かれてそれぞれのアクティビティを楽しみました。このキャンプで、普段できない貴重な体験ができ、またみんなが5リスペクトを守って楽しくキャンプを過ごすことができました。

## 100kmウォーク

前川さち  
理科

7月2日(金)～7月5日(火)の期間、100kmウォークに行ってきました。今回の生徒数は14名で、うち男子が12名という非常に極端な男女比でした。日中の気温は31～33℃位で高温・高湿になることもありましたが、全体としては曇りが多く、天候には概ね恵まれていました。期間中の2日目は日差しが強く高温で、さらに距離が長く、多くの生徒は疲れを感じたようです。同日、避暑対策をしっかりとしていたにもかかわらず



ず、1名が熱中症のため途中帰宅となり、残念でした。しかしその後13名はお互い励ましあい、完歩することができました。途中、女子生徒1人になってしまったことを気遣い、速度をゆるめる男子生徒の姿も見られました。最後に気比の松原でゴールを切った時の生徒の顔が忘れられません、思わずカメラのシャッターを押してしまいました。私自身は100km完歩には及ばずやや情けないですが・・・風景を楽しみながらのんびりと歩いて楽しかったです。生徒の感想文から抜粋・・・

○最後に、このキャンプに参加して本当に良かったです。当初の参加した理由である「達成感がありそう」は実際にゴールした直後は、あまり実感がなかったけど、1日経った7月5日に「やっと終わった」、「達成できた」という感情がわいてきました。大変だったけどこのキャンプに参加して本当に良かったです。

○昼食のあととかに長い距離を歩くようにする先生の采配に助けられました。先生とか友達とかiPodとかに助けられなければ100kmは歩けなかったと思います。この夏休みの始めにこんな貴重な体験ができて満足です。

○今回、100kmウォークを終えてみて非常に達成感を感じました。毎日30km以上歩き、日々疲れが溜まって行って大変でしたが、黙々(?)と皆で歌いながら、しゃべりながら歩いているうちにいつの間にかゴールについてたようで、実感があまり湧きません。

○思っていた以上にしんどかったです。息が上がるというしんどさではなく、足に痛みがはしるしんどさです。しかし、完歩した後は達成感と仲間との結束感は今までに経験したことがないような大きいものでした。

○100kmを歩くというのは非常に厳しかったのですが、その分歩き終えた後の達成感は非常に良いものでした。

○ホテルについてお風呂に入ったときは本当に幸せを感じました。

○もうあきらめて車に乗りたいと思ったりもしましたが、ここまで歩いたのに車に乗るなんてもったいないと思ったのであきらめませんでした。100km歩くなんて経験はたぶん人生で一度しかないと思うので参加して良かったと思いました。

○僕は去年の11月からランニングを始めて、少しは足腰も鍛えられたつもりでこのキャンプに参加しました。いざ歩いてみると30kmが長く、走るのとは大分距離感が違いました。

## チャレンジキャンプ

平井太佳子  
保健体育科

7月1日から5日の4泊5日、長野県の日本アウトワード・バウンド協会が全面サポートしたチャレンジ・キャンプ2011に行ってきました。

1日目:ロッククライミング。雨で濡れた岩壁を必死によじ登った。中には1時間近く奮闘した人も。美味しい晩御飯の後は翌日からの北アルプス登山遠征の計画と準備。

2日目:中房温泉から燕岳、大天井岳、常念岳、蝶ヶ岳を2泊3日で歩く遠征の初日。テント、寝袋、3日分の食糧、などで大型リュックは一杯に。延々と登り続けて到着した燕岳には雪が残っていて、雪の上にテントを張った。

3日目:大天井岳を越え、常念岳へ。晴れていれば「アルプスの表銀座」と呼ばれるほどの豪華な景色は、雲がかかってあまり見えなかったけれど、晴れ間から時々見える山の姿は雄大だった。

4日目:常念岳を登り、蝶ヶ岳から下山する予定だったが、夜半から暴風となり断念。一の沢へ下山。温泉に入り、センターに戻り、片づけをし、少しゆっくり過ごした。5日目:10キロ走の噂にドキドキしていたら、Run & Bike というチャレンジだった。チームで1周2キロのコースを3周、6キロを30分以内に走破する。チームには自転車4台が与えられ、誰かは走って誰かは自転車に乗る。誰が走ってもよいし、何時かわってもよい。登山でよれよれになった脚でちゃんと走れるのだろうか・・・。

最後はウォールという4メートルの手がかりも足掛かりもない板壁をチームで登り切るチャレンジ。最初の人をどう持ち上げるか、最後の一人をどう引っ張り上げるかがポイント。チーム全員で考え、声を掛け合ってよじ登った。

### 【参加メンバーの声】

「自分に限界はない」「他のメンバーに気遣いできる存在に慣れたらもっとよかった」「あきらめずにやった先にある達成感がすごい」「自分に勝ったり負けたりしたけど、このキャンプで自分の負けを少なくしたいと思った」「コミュニケーションをとれば、問題があったとしても解決しやすくなるし、それにチームワークが加われば物事がスムーズに進んでいく、と感じた」「炭酸飲みたい、菓子食いたい、休みたい」「家とも違う、学校とも違う自分がいた。本気で頑張っている全力の自分がいて不思議な感覚だった。こんなに頑張れる自分に初めて出



会ってびっくり」「ごはん、めっちゃ美味しかった~、厨房のひと、ありがとう」「自分がたいへんな時も周りのことを常に考える強さってあるんだ」「最終日はグループがホンマに一致団結できた日やと思う。壁の上の気分はサイコーやった」「くじけそうな時も辛いときもメンバーみんなが支えてくれた。たぶん今までで一番頑張れた」「誰でもできないことはあるけど、できないことを素直にできないって周りを頼ってもいいんだ」「忍耐と信頼を学んだ」「達成感」「自分と向き合って、色々乗り越えられた素晴らしい5日間でした。自分が生まれ変わった気分です」「一番達成感があるキャンプだと思いました」「普段はあまり自分を追い込むことができないけど、このキャンプではそれができて良かった」「グループで達成するというのは、ひとりで達成するときの気持ちよりも達成感があって嬉しかった」「満足度120パーセント」

テレビショッピングのあやしい宣伝文句ではありません。参加者の生の声です。

示された課題をクリアするために一生懸命やって、無様な格好を見せたり、うまくできなくて悔しくて涙が出てきたり、自分のことだけで精いっぱいになってしまっただけで非難されたり、応援してもらって嬉しかったり、大自然と自分と仲間。そして何よりも大きな「ふり返り」の時間。

活動が終了すると、その活動にかけた時間と同じくらいの時間を使って「気持ち」のシェアを行う。やってみてどうだったのか、どんな気持ちで取り組んでいたのか、仲間はどう分かって欲しいのか、丁寧に時間をかけて自分の気持ちを解きほぐし、言葉にし、伝え、互いの理解を深めて次の課題に取り組む。

それを繰り返すことで「自分を見つめ」「自分に挑戦し」「他の人にやさしい」「たくましい」人への一歩を進める、それがチャレンジ・キャンプ。

最後に、スタッフからのひとこと。

「冒険キャンプじゃないんです。強い人のためのキャンプではありません。岩登り、登山、カヌー、マウンテンバイク、そんなことはちょっと時間をかけて練習すれば誰でも

上達します。それだけならツアーに参加すれば充分です。でも、ここはそんなアウトドアのエキスパートを育てるキャンプではありません。自然は大きい。美しく厳しいです。そして自然は人を磨きます。私たちはみなさんが自分を磨くお手伝いをしたいんです」

今回私たち12人の参加者のために、6人ものスタッフがそれぞれ寝る間も惜しんで活動をサポートして下さいました。全員がアウトドアのプロである。単に経験がある、長いというだけではなく、山岳レスキューや救命までトレーニングされたエキスパートたちである。実際、常念岳からの撤退の際は、体が吹き飛ばされそうな強風であったが、全員が無事下山することができた。数日前に下見で歩いているにもかかわらず、まだ真っ暗なうちから下山ルートの再確認に一旦山を下って、もう一回登って戻って来てくれたヒルマン(スタッフのニックネーム)。雪渓の通過の安全確認をしてくれたモンド、最後の緊急事態に荷物を担いでくれたトミー。安心してチャレンジできる環境を整えてくれてありがとう。

一緒に山には登らなかつたけれど、12月からずっとプログラムを検討してくれたガジ、美味しいご飯で私たちを胃袋からサポートしてくれたキッチンスタッフ、彼らへの感謝も忘れる訳にはいかない。ありがとうございました。

## ドルフィンスイムキャンプ

高島樹生

SIS10年

僕は8年の夏休みにもこのドルフィンスイムキャンプに参加していたのでリピーターということで今回参加させていただきました。ですが、おととしと違うプログラムも組まれていて楽しめました。また、キャンプ内の最高学年ということもありこのキャンプのリーダーを務めさせていただきました。

このキャンプでは貴重な体験をたくさん経験することができます。

1日目はバスで和歌山県の串本海中センターへ移動した後、センターの方からサンゴの生態や温暖化によってサンゴが減ってきていることについてのレクチャーを受けました。その後、水族館の方に案内されて水族館の魚やカメにえさをあげたり、カメの赤ちゃんを持たせてもらったりしました。水族館のバックヤードツアーの後、またバスに乗って僕たちが向かったのはキャンプの3日間お世話になる潮岬青少年の家です。潮岬青少年の家のみなさんはみなさん優しくご飯もおいしかったです。レクレーションはキャンプに参加した中での最高学年である10年生が担当し1日目はドッチボールとなんでもバスケットをしました。みんな楽しんでいましたが僕を含む数人はテンション上がりすぎて汗だくになっていましたね。ですが、汗かいた分お風呂が気持ちよかったです。

2日目、太地町にあるくじら博物館に行きました。そこではクジラの生態や捕鯨の文化や方法、歴史などが学べました。また、博物館を少し出ると海につながっていてそこでイルカショーとクジラショーが見れました。どちらのショーも間近でイルカやクジラがジャンプするのですごい迫力でした。ショーを見て自由時間が終わるとお昼時間で、歩いて15分ほどいったところにある食堂でお昼をとることになっていました。しかしそこで食べたのはクジラ丼…。さっきまでジャンプしたり元気に泳いでいたクジラを見ていたのでちょっと複雑な気分になりました。ですが、おいしく全部いただきました。昼休憩をはさんでついでに次はイルカと泳げるドルフィンスイムです。僕は2回目だったので割りとスムーズにウエットスーツは切れたのですがみんななかなか苦戦している人が多かったです。おとしは少し曇っていて寒かったぐらいだったのですが今年の天気は快晴で海の冷たさがちょうどよいぐらいでした。みんな、イルカの背びれにつかまってイルカに引っ張ってもらったりして楽しんでいました。2日目の夜は潮岬青少年の家の方たちに手伝ってもらいながら自分たちでバーベキューをしました。ですがみんなが食べている間10年生はレクレーションの準備。もちろん定番の肝試し。肝試しの男女ペアはくじ引きで決めて1組につき1つの懐中電灯でコースをまわってもらいました。名前は書けませんが1名ほど泣いちゃっていましたね。その後予定にはなかったのですが星空があまりにもきれいだったので急遽みんなで天体観測をしました。本当にきれいでした。

最終日の3日目、串本海中センターの近

くにある海中展望台に行き、海の中から魚やサンゴが観察できました。その後はシュノーケリングでした。みんな2回目とあって2日目よりはスムーズにウエットスーツを着られていました。海の中はぼんやりしていてそれは淡水と海水が混ざっているからだと思います。途中、天候が悪化ししばらく雨が降ってきたので途中で中断しました。それでもみんな十分楽しめたと思います。はしゃぎすぎて疲れたのか大阪へ帰るバスの中ではほとんどの人が爆睡でした。

今回、リーダーということで参加した僕ですが、当初とても不安でした。「みんな言うこと聞いてくれんかったらどうしょ」とか「レクレーションうまくいかな」とかいろいろ考えていました。ですがそれは要らぬ心配でした。みんな言うこと聞いてくれましたし協力的に行動してくれました。リーダーという役を下手ながらもやりとげたことからこのキャンプは僕の大切な思い出です。最後に、このキャンプの成功に協力してくださったみなさまに感謝したいと思います。ありがとうございました。

## 食農体験キャンプ

福田真宙

SIS8年

「一緒に行きたいな〜」友達が多いからという軽い気持ちで参加した食農体験キャンプ。今まで何度かキャンプも体験しているので、それほど新鮮でもないかもしれないと思っていた私ですが、帰りのバスの中では様々な体験がよみがえり、気持ちも高ぶってしまうほど貴重で思い出深いキャンプとなりました。

初日、学校に集合すると体調不良の人が目にとまりました。引率に保健の長谷川先生がいたので安心感はありましたが、自分自身も風邪気味だったので、3日間を楽しむためにも夜更かしは止めようと心に決めてバスに乗り込みました。到着してまず集会所へ行き、2泊3日お世話になるファームの中を自由に散策しました。残念ながら体調不良な私は参加できませんでしたが、友達の話によると、足湯に行ったり、馬を触ったり、ハンモックに乗ることもできたそうです。昼食に各自お弁当を食べ、最初の仕事が始まりました。少し離れたジャージー牛牧場に行き、干し草をほぐして餌にしたり、実際に触ってみたりもしました。その後、牛乳が家庭に届くまでの過程も学びました。次に、ジャージー牛乳でアイスを作って食べたのですが、やはり味は最高。市販のアイスとは違ってまるやかな





味がしました。その後コテージにチェックインし、夕飯はレストランでのバーベキュー。牛の世話をした後にファームで育てられていた肉を食べるのには気が引けましたが、一口食べるとそんなことも忘れてしまうほど肉は柔らかく、とてもおいしかったです。夕飯の後はお楽しみのお風呂。お風呂場がとてもきれいだったので、キャンプではなく旅行にきたような気分がかなりリラックス。途中から雷がなりはじめたので私たちは退散しましたが、そのまま残ってスリルを味わっている勇氣ある人も何人かいました。さっぱりした後は、みんなで牛乳の飲み比べをしました。市販の牛乳も含めて3種類の飲み比べをするのですが、「簡単やろ〜」となめてかかっていた私は、それぞれの味の違いはわかるものの、どれがどの種類かということは分からずガッカリしてしまいました。ひとしきり盛り上がった後就寝だったのですが、朝の決意はどこへやら、学校の話で盛り上がり、夜中の2時まで起きていました。

翌日の朝は6時から仕事が始まり、眠気と闘いながら動物の小屋掃除と餌やりをしました。やぎ、羊、馬の班に分かれて各小屋の掃除となり、私はやぎの世話をしました。やぎを小屋から移動させなければならず、手こずるかと思いましたが、やぎの方は世話されるのに慣れているようで、ほんのちょっと追いつただけで移動してくれました。そしていよいよ私の一番期待していた朝食バイキング。焼き立てのパン、温かいソーセージ、ふわふわの卵、甘すぎないジャムなどファームで収穫したものを使って作ったものばかり。毎日ここで朝食を食べたい！と思ったほどおいしかったです。その後農家に行ってピーマン、玉ねぎ、椎茸の収穫をしたり、ブドウを守るためにビニールをかぶせたりもしました。1時間ほど休憩した後は、ソーセージ作り。実は最近“豚の肉を羊の腸につめたもの”ということを知った私は、何となくグロテスクな気がして、ソーセージ嫌いになっていました。なので、実際に作ってみるなんていうことが出来るのか不安になりましたが、皆で

一緒に楽しんでいたら、そんな不安もどこかへ消え去っていました。先ほど収穫した野菜や、出来たてのソーセージを使って、バーベキューというのがその日の夕食。今回は1日目と違い、火おこしから片付けまで自分たちでやったのですが、この時里山での経験が活きたと思いました。自分たちが収穫した野菜や、手作りのソーセージを食べるのは初体験でしたし、あまりにおいしくて今すぐ家族に食べさせたいと思ったほどです。また、ソーセージが何となく嫌いだった私も、おかわりしてびっくりしました。その日の夜はある葉を噛んでから、糖分を含むものを食べると味がなくなるというものでした。実際にその葉を食べた後にチョコを食べたら甘くなかったので不思議でした。

二日目の夜も、ほかのキャンプに参加している友人に電話をし、お互いのキャンプについて話をして盛り上がりつついつい夜更かししてしまいました。

最終日も6時起床の後、大好きな朝食。何度食べても飽きない朝食だったので、一日の力になりました。それからコテージを片付けチェックアウトをし、1日目に行ったジャージー牛牧場へ行き、今度は乳搾りの体験をしました。小学生の時に一度乳搾り体験しましたが、その時より上手にできたと思います。そして、楽しみにしていたお土産選び。色々あって迷いましたが、結局家族皆で楽しめる、パンとケーキにしました。帰る前に最後の昼食で、ピザを作りました。時々手作りピザを作ったこともありましたが、やっぱり自然の中で食べると絶品。ゼリーとスープも作り、結構量の多い昼食でしたが、あまりのおいしさについていけず食べすぎてしまいました。

この2泊3日の体験を通して、普段食べている食材がどのように育ち収穫されているのか。また、どんな苦労があって食卓まで届いているのかが分かりました。もちろん、3食きっちり食べられるありがたさも実感しました。帰宅した後も、スーパーで牛乳の種類を確かめたり、原材料を見てみると、今まで何気なく口にしてきたものを詳しく調べてから食べるようになりました。体に入るものが目に見える安心感をこのキャンプで感じる事ができたからかもしれません。自然の中で、実際に触れて、作って、食べてと、想像を遥かに超えたキャンプとなりましたし、私たちが体験したもの以外にも沢山プログラムがあったので、家族と再度訪れて体験してみたいと思えたキャンプでした。食育が大事だということをよく耳にしますし、多くの事を学

べる食農体験キャンプに、ぜひ多くの人が参加して欲しいと思いました。

## 心の旅

田中海咲  
SIS12年

12年生にとっては最後の夏。私は最後の年はこれしかない！と前から決めていて、参加しました。受験のことはいったん忘れ、7月3日から6日までの3泊4日をのんびりと高野山で過ごしてきました。

難波から電車に乗り継ぎ、ケーブルで坂道をもつすごい角度であり、最後にバスで私たちが3泊お世話になる恵光院に到着しました。とても大きなお寺で、部屋がいくつもあり、さすがの中というだけあって部屋の中でも冷房もいらない涼しさでした。到着して自分たちの持ってきたごはんを食べてから、数珠作りを開始！ただ糸に玉を通すだけではなく、一つ一つの玉に願いをこめて、自分の名前と干支が入り、木のいい匂いがする、世界で一つだけの数珠ができました。

そしていよいよ「心の旅」という名前にふさわしく修行。阿字観という真言密教の瞑想法を体験しました。手を組んで足も組んで心を落ち着けて、頭の中を無にするのです！が、これがとても難しく、気づけばいろいろと考えていたり、頭の中で音楽が流れ始めたり、睡魔に襲われたりと、合計で6回ありましたが、煩惱を取り除くことはやっぱりできませんでした。

晩御飯は人生初めての精進料理をいただきました。とてもヘルシーで高野山では有名な高野豆腐が毎日出たのが印象的です。男子は3回もおかわりをする人もいて、ごはんはやっぱりおいしいことに改めて気づかされました。

そして、いよいよお坊さんとの交流のための、レクリエーション。お坊さんという、かたーいイメージがありますよね？でも、まったくちがうのです！実際はとても面白く、



普通のお兄さんたちで、私たちは相談に乗ってもらったり、たわいもない話をしたりして盛り上がりました。お坊さんたちも含めたフルーツバスケットでは、福島先生が生徒たちよりも本気になってみんな爆笑でした。

2日目は、朝から阿字観をしてから護摩修行でした。護摩とは、薪木を炉に入れ焚いて、念仏に人間の願をささげるもので、迫力があり、前日のお坊さんたちの様子とは変わって、すごく真剣にしていたので驚きました。

朝も精進料理を食べ、そのあと作務でお寺の掃除をしました。私にとっては久しぶりの雑巾掃除で、長い廊下をみんなで競争しながら走るの、楽しかったです。その後は写経があり、般若心経をみんなで唱えてから自分たちのペースで一字一句移していきました。最後に自分の願いと名前を書き、奉納をしました。

この日は奥の院へ参拝しました。高い木々やたくさんのお墓があり、とても神秘的な場所です。昼を食べてからは、奥の院の逆方向へ向かい、金剛峰寺などの有名なお寺や、お坊さんが通っている大学などに、のんびりとみんなで散歩をしました。高野山はその地域全体がとてもいい「和」の雰囲気でお寺がいくつもあり、4日間でも十分楽しめる場所でした。

この日の夜もレクリエーションで、お坊さんたちとの交流やまたまたフルーツバスケットを楽しみました。

3日目は自由時間がメインで、みんな思い思いに、過ごしていました。部屋でのんびりする人もいれば、観光地を巡る人もいました。私は前日に訪れたところへ再び行ったり、お土産を購入したり、最後は山登りをしたりと、とてもアクティブに充実した一日を過ごしました。この日法話では住職さんに宗教などの話をさせていただき、とても説得力があり、納得したことを覚えています。なんとそれを聞いている間に地震が起こり、高野山では大したことはなかったのですが、住職さんがその間よろけずに仁王立ちでずっと立っていることにびっくりしました。夜はお待ちかねの花火をし、一瞬で終わり、時間も余ってしまったので奥の院(お墓)で肝試しまでできました。

最後の日も護摩や阿字観などを行い、部屋を片付けてからお世話になった恵光院に感謝の手紙を書き、そして写真を撮ってからは最後の自由時間を堪能しました。

あつという間の4日間で、普段の生活とはかけ離れて本当に楽しかったです。お寺

での生活は一生の思い出になりました。引率して下さった先生方、恵光院のみなさんありがとうございました！

## 大河ドラマを旅する

下久保恵美

SIS10年

私はこの夏、大河ドラマを旅するというキャンプに参加しました。今回は、二泊三日にわたり、今年の大河ドラマ「江〜姫たちの戦国〜」から、江の故郷、滋賀県長浜と京都に行ってきました。

私は、江はもちろん、歴史についてド素人なため、果たして大丈夫だろうか、と心配でしたが、二日目にあるプレゼンテーションもあり、付け焼刃ですが、江と、その周りの人物に関する予習をしていきました。

キャンプの中では、グループに別れ、私は同じ10年生の逢坂亜美さんと、藤倉諒子さん、木村郁美さんと二日間の行動を共にしました。

まず、大阪から長浜に到着したあと、それぞれのグループで午後4時まで自由行動。私達は電車に乗り、木ノ本駅で降り、木ノ本自蔵院に着きました。ここには、見上げるくらい大きな地蔵菩薩銅像があります。また、身代わり蛙という見たことのない魔除けが売っていました。

また、御戒壇巡りができ、私達は連なって真っ暗な戒壇の中を進みました。

次に、明楽寺というお寺に行きました。朝のためなのか、人どころか住職さんさえ見当たらない中、私たちは暫くお寺を眺めていました。その後、どうしてそうなったのか、皆で高月まで歩こう！となりました。皆で両脇に田んぼしかない風景を横目に歩き、林の中にある神社で休んだりして、いろいろと珍しい経験ができました。最終的に4kmくらい歩いたあと、長浜城歴史博物館で他のグループと合流。博物館内を見学しました。天守閣からは琵琶湖が一望でき、とても美しかったです。

その後、ホテルにチェックインし、部屋で休憩したあと、夕食、そしてその後は先に行った長浜城歴史博物館の職員である太田浩司さんに市と浅井三姉妹の生涯について講義を受けました。この方は、今回の大河ドラマの歴史公証を担当されていて、かなり細かい歴史や、ドラマの裏話なども聞けました。またわざわざわかりやすいプリントも作っ

てくださり、とても勉強になった1時間でした。

二日目は、午前中は長浜市内の黒壁スクエアを散策、午後は竹生島に行く、というスケジュールでした。黒壁スクエアでは、ガラス工芸やオルゴール館などを見て、おみやげ屋さんで各自気に入ったものを買っていました。午後からは加能先生引率の元、4人で竹生島に向かいました。

竹生島は、宝厳寺と都久夫須麻神社があり、沢山の重要文化財を所有する島です。浅井家は、この島を守り神として信仰していました。

竹生島につくと、まず、私は島を覆う森に圧倒されました。急な階段を上って森の上にある宝厳寺と神社に参拝しました。神社ではかわらけ投げという願掛けをしてきました。外界から隔離されたようなこの島は、本当に神さまが住んでいるようで帰るとき、とても心が洗われた気分が階段を降りました。

その後、長浜に戻り、夕食を食べて、発表の最終確認に取り掛かりました。発表は7時半から始まりましたが、当初の終了予定時刻をかなり過ぎてしまいました。後半の方になると、日中の疲れからか、眠たそうな人も何人かいました。

次の日、ホテルをチェックアウトした後、京都に向かいました。京都では、養源院の見学をしました。

養源院は、浅井長政の供養のため、娘の淀殿が創建しました。一度消失しましたが、江の願いを受け再建し、伏見城の中の御殿から一部を移築しています。養源院の見所は、伏見城から移築された血天井、どう歩いても音のなる鶯張りの廊下、俵屋宗達という画家の襖絵です。また、今年の大河ドラマのテーマを受け、普段は公開していない江・淀殿・豊臣秀頼の肖像画を見ることができました。

そのから、三千三間堂を見る人とそのまま帰る人と別れ、キャンプは終了しました。私は、三千三間堂を見るため残り、堂内にずらりと並んだ観音さまたちに圧倒されて



きました。

キャンプでは、歴史観光一色と思いきや、食べ物屋さんなど好きなところに行った記憶も多々あります。しかし、町並み自体など随所に歴史を感じました。また、お寺や、養源院などで仏像や肖像画などのものを見て、そのもの自体が生きてきた時間に気圧されました。

江を通して、歴史だけでなく歴史と現在が続いていることを再確認できた充実したキャンプになったと思います。

## 農家ホームステイ

青山比呂乃

図書館

農家ホームステイキャンプは、昨年度から始まった新しいキャンプで、8・9年生のためのプログラムです。今回は、思わぬ地震にも見舞われ、一時は続行すべきかどうか迷いましたが、ステイ先の農家の皆さんや役場の係の皆さんの丁寧な対応により、安心して予定通り最後まで充実したキャンプを行うことができました。本当に感謝しています。

今年は、昨年に続いて2回目の参加者もあり、その参加者の成長ぶりにステイ先の方が感激してくださったり、ステイ先の中学生の通う地元の美山中学校の授業に校長先生のお許しも出て、参加したりした人もいました。SISの授業との違いにカルチャーショックを受けた人もいたようですが、美山中学の生徒のお母さんからは「いつも同じ顔触れで刺激が少ないので、SISの積極的で活発な発言をする生徒の様子は、とてもよい刺激になった」とコメントをいただきました。

なお、その後日高川町は9月の台風により、数名の死傷者が出て道や橋も甚大な被害を受けているため、大変心配しているのですが、キャンプ参加者が心配して、ステイ先の農家の皆さんにメール等で連絡を取り合っていて、「そうした連絡が来るのがとても皆さんの復興の励みになります」と役場の方から連絡を受けました。本



当の心のつながりができたのだなあと感じています。

以下は、参加者の感想です。

### 8-1 鶴飼楓香

今回は農家ホームステイキャンプに参加しました。和歌山県の日高川町という、自然に囲まれたとても素敵な場所で三泊四日を過ごしました。私たちは、普段の生活では体験する事の出来ないことをたくさん体験することができました。私たちのペアは「民宿・千」の竹内さんのお宅にお世話になり、農業はもちろん、料理・お菓子作りや川遊びなど様々な事を体験させてもらいました。

ホストファミリーのおじいちゃんとおばあちゃんは一日目から本当の家族のように接してくれて、夜には家族全員でバーベキューもしてくれました。私たちも、不安もなくとても楽しく活動することができました。まず、かしわ餅作りのためのかしわの葉っぱをとり近くのをドライブしながら葉っぱを探して、途中にある天然水が湧き出ている場所で水を飲んだりしました。天然なのにととても冷たくておどろきました。

二日目の午前中に家の庭にある畑でたくさん野菜を収穫した後、おばあちゃんと三人で手を真っ白にしながらかしわ餅作りをしました。家のすぐそこに川があって、私たちは少し時間ができた時に歩いて川に行って遊びました。また、夕飯にはおじいちゃんが私たちのために竹を用意して流しそうめんをしてくれました。みんなで交代しながらそうめんを流していっておじいちゃんの番になると、おじいちゃんはとても楽しそうに次々に流してくるので私たちは食べるのが大変でした。でもすごく楽しかったです。流しそうめんの途中、震度5強という大きな地震が起こって私は泣きそうなくほどびっくりしたけど特に大きな事故もなくよかったです。

三日目には久しぶりに学校のみなどとそれぞれのホストファミリーも集まって、バーベキューをしたりゲームをしたり花火もとても楽しかったです。

いつもとは全く違う環境で過ごしたこの四日間はわたしにとってとても素敵な思い出になりました。ステイ先にいた、竹内さんの孫の同じ年の女の子と仲良くなって一緒に川に行って遊んだりして、本当に楽しめました。自分のもう一つの田舎ができたみたいで、お別れがとてもつらかったです。

おじいちゃんとおばあちゃんがいつも見せてくれていた最高のスマイルとこの四日間のことは忘れません。今回お世話になった「民宿・千」のみなさんとこのキャンプに



引率して下さった青山先生と山城先生、本当にありがとうございました。

### 8-2 宮崎友里愛

私は今回農家ホームステイに行ってきました。このキャンプは2、3人ペアで泊まる企画で、私は日高川町にある西川さんのお宅にお世話になりました。このキャンプは各家によって体験できることが違います。私は農業や魚釣りを体験しました。農業体験ではきゅうりや梅などを収穫しました。きゅうりは収穫してから山からの水で冷やして、1時間もしないうちに食べられたので新鮮でおいしかったです。他には近くの家の畑に生えている赤紫蘇をもらって天ぷらにしたりしました。天ぷらは普通、高温でカラッと揚げられるものですが、低温でじっくり揚げてしまったので、少し残念でしたが今では笑い話になっています。梅の収穫では軍手をはめて青い梅を探して枝から取るという作業をしていました。少し大変だったけど、皆で取った量などを競い合うなどして楽しみながら収穫を手伝いました。この時収穫した梅は自宅へのお土産として持たせてもらいました。家に帰って、梅酒と梅シロップにしました。私たちが収穫したのは青々としたまだ枝になっている梅でしたが、西川さん(おじいちゃん)は少し熟した梅を取ってくれました。この梅は皮をむき、種をとってジャムにしました。これもまたお土産として持たせてもらい、今でも時々朝食のパンと一緒にいただいています。

西川さんの家は川から車で2、3分のところにありました。おじいちゃんは釣りがとても得意で、私たちも何度か魚釣りに連れて行ってもらいました。最初は釣れなかった



けれど、30分もしないうちに1度に3匹も釣れるというような奇跡も起こりました。3泊の滞在の間、4回も川に遊びに連れて行ってもらいました。ホームステイ2日目の夕方、大好きな川で遊んでいるとき、日高川町で震度5強という地震が起こりました。現地は停電もなく家具が倒れることもなく、けがはありませんでしたが、家族は大変心配していたようです。このようなハプニングはありましたが、和歌山への旅は本当に楽しいものになりました。

私たちが普段生活している忙しい時間の流れとは違い、ゆっくりと過ぎていく時間の中で自然を感じながら過ごした4日間はとても素敵な思い出です。最初、西川さんに会うまでは、ドキドキわくわくしていましたが、帰るころには寂しくてまた必ず西川さんの家に行くという約束をしたほどです。今回お世話になった西川さん、和歌山県の日高川町の皆さん、そして引率してくれた青山先生と山城先生にとても感謝しています。ありがとうございました。

## 職業体験プログラム

安田紗里奈

SIS12年

最初は悪戦苦闘しました。なぜなら、このプログラムは自分の興味のある職業を選び、自ら職場と交渉をするという、完全に自分の力で進めていくものだったからです。

私はお菓子作りが大好きで、色々なレシピを試すのが好きなので、ケーキなどの企画開発にとても興味があります。そこで私は、電話交渉と足を運んでの直接交渉を経て、ケーキショップ「五感」の商品を作っているアトリエ(工場)に2日間通わせていただくことが出来ました。「五感」のケーキは昔からよく食べているので、受け入れていただけると決まったときは本当に嬉しく思いました。

当日は、白い服に黒のエプロン、コック帽をかぶらせていただき、すっかりパティシエになった気分でした。工場内に入る際、念入りに手を洗ったり、エアシャワーという機



械でほこりを吹き飛ばしたりと、清潔であることが大切だということが分かりました。今年入社したばかりという若い女性社員さんに案内していただきながら、全ての職場を覗かせていただきました。焼き場やロール場など、場所によって作業や扱う商品が違い、とても興味深く拝見させていただきました。また全ての社員さんに、挨拶をしてもらいました。場所によっては機械の音が大きく、大声を出さなければ聞こえない所もあり、最初は少し恥ずかしく感じましたが、繰り返すごとに慣れてきました。職場では挨拶や礼儀が大切なのだと思い、とても勉強になりました。

体験をさせていただいている間、色々なことを学びました。膨らみの悪いマドレーヌや、ロールケーキの端っこは捨てるように言われた時、内心「食べられそうなのに…」ともったいない気持ちになりました。しかし、完璧な商品を提供するには仕方がないのだと思います。ハッサクの皮むきをした時は、皮をむくのは地道な作業ですが、ケーキに飾られるフルーツの一部になるので、下ごしらえもかかせない仕事だと感じました。ロールケーキの箱の組み立てと箱詰めを行った際は、一緒に作業をしていた女の人の組み立てる速さに圧倒されました。きっと繰り返していらっしやるので、慣れているのだと思います。その後、ロールケーキ用のシートのスポンジケーキの上に、生クリームをのせる作業をしました。2日目に初めて生クリームを扱わせてもらったので、とても嬉しく思いました。マンゴーの皮むきの作業では、部位によってカットの仕方が違うことを教わりました。周りの実はデコレーション用に大きくカットし、芯の周りはロールケーキの具用に細かく刻み、種の周りはピューレ用に手で絞りました。マンゴーを無駄にしないように使い切るように工夫されていて、すごいなと思いました。今回一番大変だったのは、洗い物です。まずはボウルや泡だて器などの細々したものを洗い、その後マドレーヌ型を洗いました。大きな四角い天板に何十個も型があいている業務用のマドレーヌ型で、とても大きくて重かったです。その型を数十枚洗い終えたら、今度は別の種類のマドレーヌ型を、また数十枚渡されました。同じ要領でそれらを洗い終えると、次は丸いケーキ型を大量に渡されました。この時点で既にたわしを持つ手が痛くなっていましたが、頑張って洗い終えました。とても疲れましたが、道具はお菓子作りの基本なので、清潔に保つことは重要だと思います。

今回の職業体験を通して、お菓子の大量生産のしくみを知ることができました。また職場の礼儀、衛生管理なども知ることができました。今回は私の希望していた「商品開発」とは少し異なった仕事内容でしたが、ケーキショップの裏側を体験することができ、とても勉強になりました。職業体験を受け入れてくださった五感の皆さま、そして職業体験プログラムを担当していただいた先生方に、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

## 写真文芸帳キャンプ

武部由理佳

SIS10年



7月4日午前8時30分、斉藤先生と生徒8名で、写真文芸帳キャンプが始まりました。スクールバスで滋賀へ出発し、信楽を皮切りに、甲賀・近江八幡・安土城跡の順にまわります。移動のバスでは、学年を超え今から始まるキャンプに胸を躍らせ、ランプや会話を楽しみ、約2時間ほどで信楽に到着しました。

信楽では、信楽焼という焼き物が有名で、たぬきやかえるの置物が温かく出迎えてくれました。各自で、たぬき・かえる・ふくろうなどの置物の何ともコミカルな表情に癒されながら、どう写真に写せば置物の良さを引き立たせられるか、どのアングルが一番良く写るかを模索しながら、撮影を楽しみました。

次に向かったのは、忍者で有名な甲賀です。甲賀では忍術屋敷に行き、説明を受けながら忍者達が実際使っていたとされる沢山のからくりを見てまわりました。そこでも沢山の写真を撮影し、そのあと、それぞれ手裏剣を体験したり、忍者グッズを見たりして楽しみました。また、忍術屋敷の周囲の古い住居も、とても趣がありました。これらの撮影にもいそしんで、皆良い写真が撮れたようでした。

甲賀を後にし、車内でお弁当を食べながら、近江八幡に向かいました。本来はそこで水郷巡りをするはずだったのですが、時

(次ページ★に続く)

# 『ザ・ミュージックマン』

## 2月に公演

オールスクールプロダクションよりお知らせ

Nakae Osako,

Production Team, 日本語科

今年はオールスクールプロダクションがあります。今年アメリカの代表的ミュージカルコメディ、『ザ・ミュージックマン』をします。舞台は1912年のアイオワ州、リバーシティです。

公演は2012年2月16日(木)～18日(土)で、木曜の放課後、金曜の晩、土曜は昼公演、夜公演の2回となります。

公演時間、チケット情報など、詳細が決まり次第、お知らせをいたします。

This year's All School Production will be a musical comedy, *The Music Man*, by Meredith Willson. This has been a well-known popular American musical since 1957.

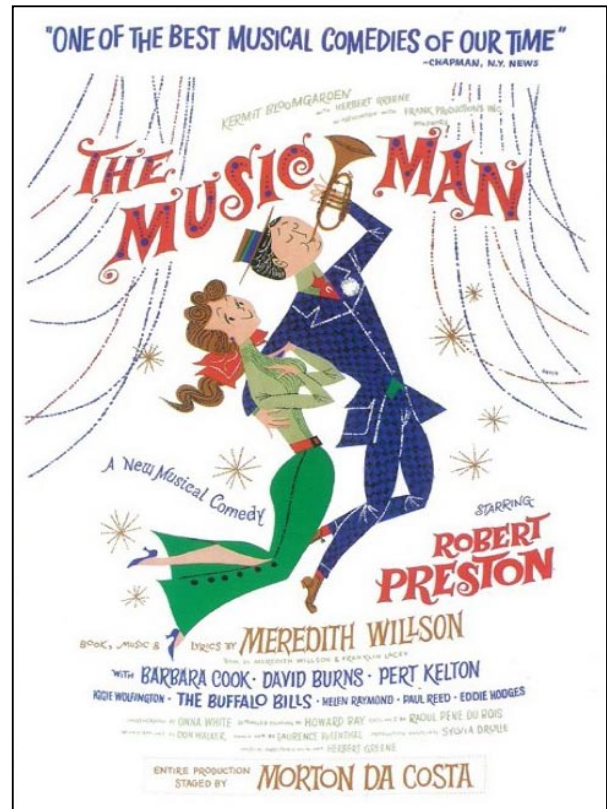
The performances will be held from February 16 to 18, 2012 in the school theatre. There will be one performance after school on Thursday, February 16, one evening performance on Friday, February 17, and two performances (matinee and evening) on Saturday, February 18.

More information will become available over the next few months.

あらすじ

ハロルド・ヒルは、いわゆる詐欺師である。いろいろな町を転々とし、ゆく先々で楽団編成をほのめかし楽器を買わせるが、そのとたん行方をくらませる。町の人たちは大金をつぎ込むが、肝心の監督はとんずら・・・。

アイオワ州リバーシティの町にやって来たハロルドは、子どもたちの楽団のための楽器やユニフォーム、楽器の教本などを買うよう町の人たちを説得し始める。彼の説得は、市長や教育委員会の委員たち、また地元の図書館司書でピアノ教師であるマリアン・パルーに数度さえぎられるが、そのうちマリアンとハロルドには恋が芽生える。そして町の人たちがハロルドの正体に気づいたとき、マリアンは彼を弁護していた。



Plot:

Harold Hill is a con man who has been traveling from town to town selling musical instruments and pretending to organize a band, but skipping out early, leaving the townspeople without a band director or their money. While working to convince the people of River City, Iowa, to buy instruments, uniforms, and instruction books, he is frequently interrupted by the mayor, school board members, and Marian Paroo, the local librarian/piano teacher. However, as time goes by, Marian and Harold develop a romantic relationship, and she is left to defend him when the townspeople realize his true intentions.

(★前ページの続き)

間の都合上近江八幡の撮影兼観光のみとなりました。近江八幡には、神社やロープウェイがあり、巡るはずだった水郷も見る事が出来ました。運が良かった何人かは、ちょうど船を見る事が出来たようで、その写真も残す事が出来、とても良かったと思います。

最後の撮影場所は、安土城跡です。ここでは安土山を頂上まで登り、登り切った達成感と澄んだ空気を味わいながら記念写真を撮りました。山を登る途中には木々が生い茂り、石段にはお地藏様が掘ってある

など興味深いものがあつたりと、少し体力は使いましたが楽しみながら撮影をすることが出来ました。また下山する際、違うルートを通ってお城を見ることが出来ました。その幻想的で堂々とした姿には圧倒されてしまいました。皆無事に下山し、今日一日を通しても良い撮影が出来たと、満足感に満たされ帰りのバスに乗りました。

帰りのバスの中では、ちょっとした夕食を頂きました。そのメニューは、なんと鮎寿司でした。鮎寿司は滋賀の名物だそうで、鮎の醃漬された何とも言えない食べ物に、好

みは分かれましたが、とても美味しく頂きました。

翌日からの三日間は、学校で文芸帳作成の作業です。今年はソフトカバーの文芸帳で、それぞれ各自の作品を作り上げ、またそれを製本して自分だけの文芸帳を作成しました。協力して作業をし、さらに交流を深めあい、とても楽しい三日間となりました。写真撮影や文芸帳作成を通して、仲間と協力することを学べたり、自分の感性を磨けたので、とても良い経験になりました。

# 東日本支援センター活動報告

北嶋友香

SIS11年

今年の3月11日に東日本大震災が起こってから8ヶ月が経ちました。被災した方々は今もまだ大変な暮らしを送っていらっしゃいます。原発の問題もまだ解決したわけではありませんし、多くの町はまだまだこれから長い時間をかけて復興していかなければなりません。そして何より恐怖や悲しみ苦しみなどの心の傷が癒えるのはとても時間がかかります。そうした中で私たち東日本支援センターは、自分たちにできることを模索しながら、被災した方々が少しでも早く、少しでも多く笑顔になるお手伝いをしたいと願い、震災後すぐに結成・活動し始め今に至ります。メンバーは、SIS12年の松宮飛、11年の松山紫乃、北嶋友香、矢橋良基、OIS12年のAnna Ishihara、10年のKaori Momoki、Je Eun Yooの計7人で構成されています。もともとは松宮、松山、北嶋が「本当にこれは大変なことになったから私たちも何か動かなくてはいけない。何が出来るだろう。」という思いからすぐに密に連絡を取りはじめ井藤教頭先生も交えて相談した結果、3月18日に行われたclass of 2011主催の卒業ライブで募金活動をしたのが始まりです。そこから何かSOISらしい支援のかたちを、と考へ、たくさんの協力を得て、またメンバーも増えてきて今の東日本支援センターのかたちがあります。

これまで東日本支援センターでは、卒業ライブでの募金活動を行ったり、東北に生徒ボランティアを派遣したりしてきました。また他に東日本支援センターのお仕事として、生徒企画のイベントの利益や学園祭の収益金等のお金の管理とそれをどう被災者の方々のために使っていくかの検討、生徒が企画を行う際の承認とその情報管理、学校外のボランティア団体との提携、学校内外への発信など多岐にわたることをSOISの生徒代表で行っています。

震災が起きてからこの8ヶ月間の間に本当にたくさんの人が募金活動に協力してくださり、また中にはパークセールやイベントを企画してその売り上げをすべて寄付して下さる人もいました。10/10現在、東日本支援センターにあるものと後述の団体を通じて既に東北へ送ったものと合わせて、合計309,730円、320ユーロと4686点(ベルマーク)があります。ここに感謝の意を込めて、全ての方のお名前を列挙します。ほんとうにありがとうございました。

◇

## ～協力者一覧～(敬称略・順不同)

Class of 2011(卒業ライブ)

OIS Gr.12 Anna Ishihara (SOISコラボ)

お菓子部(パークセール)

SIS G11(遠足)

SIS卒業生 藤盛祐輔(バイオリンコンサート)

SIS12年 河村拓(スポーツイベント)

Gymnasium Grafing(ドイツにあるSOIS姉妹校)

学園祭収益金募金クラス

SIS 8-1, 8-2, 8-3, 9-1, 9-2, 10-1, 10-3, 10-4, 11-1, 11-2, 11-3, 11-4, 12-2, 12-3, OIS Gr.8

SIS12年 パーマー恵理沙、岡本紗栄(ベルマーク募金)

OIS Graduate Risa Nishiguchi & OIS保護者会(東北応援Tシャツ作成・販売)

SOIS Art教員 Ms.Henbest (Art bagの作成・寄付)

◇

現在東日本支援センターに集められたお金は、関西の大学生を中心に構成された東北ボランティアの団体、Heart on Coinを通じて宮城県三陸町にある志津川中学校に全て寄付されています(ベルマーク募金を除く)。Heart on Coinは日本中、世界中に支援したいけれどできないというもどかしさを抱えた人たちの想いをメッセージとお金に乗せて被災した方々1人1人に届け、また将来を担う子どもたちにバトンを渡していこうと活動している団体です。この理念に私たち東日本支援センターはとても共感し、提携を決めました。また、前回の送金時はメッセージを一緒に送りました。そのメッセージを志津川中学校の方が受け取った時の写真がこちらです。



SOISはこの志津川中学校に、これからも提携という形で相互交流をはかりながら支援していく予定です。(Heart on Coin HP: <http://www.aicat.org/heartoncoin/>) また、このときに送ったメッセージですが、急な呼びかけにも関わらず本当にたくさんの人が協力してくれました。ありがとうございました。

東日本支援センターのもので10/10現在進行している活動としては、SIS10年生が中心のOne for All(OFA)が行っているスポーツタオルの販売企画があります。こちらは11月19日のインターナショナルフェアで販売予定ですので、ぜひお買い求めください。これからも東日本支援センターは様々なかたちの支援を行っていく予定なので、引き続きご協力お願いします。

また、9月22日から26日まで岩手県にボランティアに行った生徒による報告会が10月18日に開かれます。この震災ボランティアには急な呼びかけだったにも関わらず、最初のオリエンテーションには50名を超えるSOIS高等部の生徒が参加、最終的に32人もの生徒が申し込んでくれました。実際に参加してくれた人、さまざまな事情で参加できなかった人、そして少しでも興味を持ってくれたみなさんにほんとうに感謝しています。次ページには実際に参加してくれた人たちの声を掲載しています。少しでもみなさんに東北の様子が伝われば幸いです。ぜひお読みになってみてください。



# 東北震災ボランティアに参加して

松山紫乃  
SIS11年

私が、この東日本大震災というものに本当の意味で向き合えたのは、東北で2日目のことでした。その日訪れた釜石市には、3.11から時間が止まったまま残っているところがいくつもありました。私はとある小学校の屋上まで上っている途中、壁についている泥を発見したのです。小学校の4階の天井付近についていたその泥は、地震直後に釜石市を襲った津波の高さを明確に表していました。その時初めて私は自分が



今いる場所をきちんと認識したのかもしれない。津波の恐ろしさを物語っているその泥や荒れ果てた校内を見て、自分が今いるこの場所は、たくさんの罪なき人の命が奪われていった場所なのだということを強く実感したのです。それまで、建物の崩壊や瓦礫の量など視覚的なものにばかり気を取られていましたが、私はこのリアルな傷跡を「恐怖」として感じたことで今自分がいる場所と、実際に起きた出来事とが、初めて自分の中で繋がったような気がしました。

たくさんのボランティアの方たちが繰り返し繰り返し言っていたのは「忘れないで。そして、伝えて。」ということでした。どんなに私達が支援の手を差し伸べたくても、大阪と東北という物理的距離や高校生としての身分上、限界があるのが現状です。でも、被災者だけでなく、その人たちを助けたいと思っている人たちも「忘れないでほしい。伝えてほしい。」ということが一番に願っているのなら、大阪にいる私達は助けたいと思っている人たちをさらに助けることだってできるのではないのでしょうか。私が現地で感じた恐怖も、私が感じたままになるべくたくさんの人に伝えていきたいと思います。そして私たち自身が出来ること、大きくても小さくても、直接的でも間接的でも、少しずつの積み重ねが大切だということをたくさんのボランティアの方々から学びました。私は、センターの一員としてこの学校の中でできることを、焦らずに、より長く、私達なりにやっていきたいと思います。

最後になりましたが、今回この東北ボランティアの活動を企画して下さいましたSISの平井先生と田中先生、それからOISのMs. Melville-Realに心から感謝したいと思います。貴重な経験をさせて頂く機会を設けて下さり、本当にありがとうございました。

◇

東北のボランティアに参加してくれたみんなからの感想や思いを東北震災ボランティア用のブログ(<http://soisgototohoku.blogspot.com/>)に載せています。今回は、その中からほんの一部だけ抜粋して紹介したいと思います。みんなの熱い気持ちが伝わってくると思うので、是非ブログの方も見てみて下さい。

ボランティアに行くのもたくさんの人々に支えられていることを忘

れてはいけません。ボランティアを支援してくださる人たち、むこうで僕たちを受け入れてくれたボランティアセンターの人たち、寄付をしてくださった人々などたくさんの人々の気持ちがあり、僕たちはボランティアに行くことができました。「してあげる」のではなく「させてもらう」の気持ちを大切に。これはむこうの代表の方々がお口をすっぱくして言っていたことです。僕もそのとおりでと思います。これからボランティアに行く人がこれを意識してくれたらな、と思います。(11年S)

1日に行えるボランティアはほんの少しだけ。「これではもとの釜石市に戻すのに一体何年かかってしまうのだろう」と不安に思ったこともありましたが、しかし、そんな中で現地の人の暖かい差し入れや笑顔を見ると、私たちの小さなボランティアでも彼らの心をちゃんとケアすることができているのだなと実感しました。(11年T)

このような充実した三日間を経て考えたことは、ボランティアの輪をもっともっと、広げるということです。SOISの生徒と教員合わせて35人が短い期間のなかで必死に作業をしても、できること、場所は限られてきます。遠野まごころネットの班長さんも、「今は連休中だからこんなにも活動をしてくださる人は多いですが、これが平日となると半分以下に減ります。だからもっとボランティアをしてくださる方がほしいんです。」とおっしゃっていました。(中略)ただ東北に行って作業をするのではなく、次につなげる、周りの人に今の被災地の状況を伝えてボランティアの輪を広げる、までが「ボランティア活動」だと考えています。(10年S)

学校から被災地へボランティアに行くことを企画して下さいました先生方に本当に感謝しています。また、まごころネット、周りのボランティアの方々、桜井さんは、私たち高校生の知らないことを丁寧に教えて下さり、感謝しています。お金を出してくれた両親、ボランティアの私たちを受け入れてくれた被災地の方にもお礼を言いたいです。お礼として私にできることを考えたとき、何年後か、東北が以前のように復興したら、また東北を訪れて、世界の人々に、自然がたくさんのおいしい東北を発信したいと思いました。(11年U)

# Children's Wishes for Japan

The following article was published in the *Japan Times* on June 21st, 2011.

**Art aid sent as therapy for disaster-zone kids**

Mark Hollstein

*Special to The Japan Times, OIS Parent*

Fifth-grader Emiliano Renteria was sitting quietly in class on March 11 when his elementary school in Miyagi Prefecture began to shake violently.

"The earthquake was so strong that chairs were flying all around the room," he said. "I thought I was going to die. I hid under the table. The teacher told us to get under our tables."

Renteria said he returned home that day to find things in a state of disarray. But he considers himself lucky — a friend's house was washed away by the tsunami that followed the quake.

But with gas and electricity knocked out, "we had to eat cold stuff all the time," he recalled. And as the danger from radiation leaking from the crippled Fukushima No. 1 nuclear plant was growing, Renteria's father decided it would be safer for his family to move away from the area.

Nearly three months later, Renteria is using his lunch break to help his new classmates at Osaka International School of Kwansei Gakuin (OIS) in Minoo, Osaka Prefecture, take part in an international effort to support other children from the Tohoku region still suffering in the aftermath of the catastrophe.

He picks up a brightly painted canvas

tote bag from a large pile on the floor and begins to fill it with 20 different kinds of art and music supplies — paints, brushes, colored pencils, sketchbooks, erasers, a recorder and music to play — that are laid out in a row of boxes on tables set up at the school's front entrance.

The bag Renteria is filling was hand-painted with a message of hope by a child in Thailand. Some of his classmates are filling bags painted by children in Austria or ones they decorated themselves.

Most feature bright colors, flowers, rainbows and other symbols of hope and renewal.

In addition to the art supplies, Renteria picks two or three messages of support to include in his bag, each colorfully illustrated by a child attending one of the 30 schools in 23 countries that have raised money, or contributed in other ways to make this gift possible.

When the 212 bags are ready, Renteria helps box and load them onto a truck that will deliver them to Kirikiri Elementary School in Otsuchi, Iwate Prefecture, which was created after the quake for children from four elementary schools that were destroyed.

Renteria said he's glad the children will have new school supplies. "I hope now they'll have something to do other than just worrying about what's going to happen to them," he said.



A similar idea inspired Renteria's new art teacher at OIS, Jennifer Henbest de Calvillo, to set up Children's Wishes for Japan in the days immediately after the quake.

By providing art and music supplies to children in the disaster-hit northeast, she hoped to give them a productive way to spend their time in evacuation shelters, as well as the tools necessary to express their emotions and "reconnect with humanity in a way that only art can provide."

"It's natural that after the earthquake the first donations people made were to the Red Cross," Henbest de Calvillo said. "The idea was to make sure people had clean water and food, shelter and heating oil and all those kinds of things. But after those immediate needs had been met, we still have people who might be in shelters for two years or more."

In such situations "the healing power of art and music can really make a difference," she said.

Children's Wishes for Japan began with a \$100 donation from Henbest de Calvillo's father, who doubted she could meet her goal of raising \$10,000.

"Thinking about how much money was needed, I was a little scared," she admitted.

But she had one advantage: she had taught at international schools in Zimbabwe, Myanmar, Vietnam and Thailand and had also made connections with other schools around the world through art exchange programs.

"Soon after I contacted The Peterson  
(次ページ★に続く)



# 卒業生、教育実習で奮闘

## 短くも充実した2週間

原 優子

上智大学外国語学部英語学科4回生、2008年SIS卒業生

この学校で2週間教育実習生として戻ってきました。山本先生の指導のもと、7年3組のホームルームと、7年生s+レベルの英語の授業を担当させていただきました。教育実習が始まってからは、毎日が緊張の連続でしたが、周りから支えられ、落ち着いて前向きに実習に取り組むことができました。

さまざまな学年・レベルの英語授業を見ていく中で、それぞれのクラスの雰囲気が多様でした。特に、生徒のほとんどは英語が好きで積極的に課題と向き合う姿勢が強く残っています。この学校では外国語に力を入れ、生徒たちが自身の意見や主張をしつかり持ち、それらを皆に表現できる力をつけていく教育の姿勢が見られました。

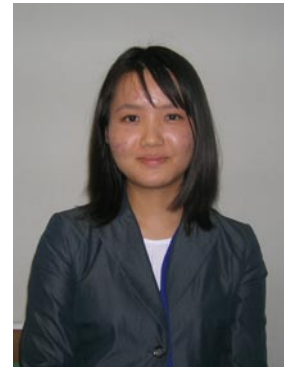
はじめての授業を行った時、担当する内容が好きだったということもあり、たくさんアクティビティを入れたり、話題を膨らませたりしました。授業を行うたびに、生徒たちの授業に対する反応が分かるようになり、分からない、難しい、と感じた場合は素直に表情に出ているため、分かりやすい英語を用いたり、日本語で詳しく説明したりと、言語を上手く駆使していくことも大切だと感じました。また、私は英語もアートも好きであったため、両方とも授業に盛り込められる授業づくりが楽しかったです。外国語を学ぶには、アートやイラストを含めていくのも大切なアイテムで、より言語に対する理解を深める要素だとも感じたので、常に用いるようにしていました。生徒たちも描いてきた絵に対し、コメントを添えてくれたため、やりがいがありました。また、最後には一生懸命お手紙を書いて下さり、有難うございました。手紙を書くのも読むのも好きであるため、一枚一枚に目を通していくのが楽しかったです。手紙を読むと生徒一人ひとりの個性や雰囲気も伝わってきます。デジ

タル化する時代ですが、アナログだと相手の表情の読み取りが出来るので良いものです。

また、教育実習を通して、生徒と教師との距離感の大切さを学びました。また、授業内においても、発言しやすい環境が整っているかどうか参考になりました。教室の雰囲気によって生徒の学ぶ姿勢も変わっていくため、環境の重要性が改めて理解できました。教師としても、生徒たち同士の人間関係を把握し、その関係性の視野も広げていくことが必要であると感じました。この学校では、異文化や個性、国際性をすべて広く受け止めることが特徴であるため、そういった教育の取り方が見られました。特に、外国語活動において、異文化や多様性を受け止め、自身の意見を他の人たちに主張できる表現力を身につけていく力は今後必要であるように感じました。

しかし、実習の中で、生徒には常にアメとムチが必要であることも改めて知りました。授業を教えることだけでなく、生徒が将来一人前になるための人間性を作り上げていくことも教師の役割だと知りました。さまざまな生徒がいる中で、時にはきちんと注意しなければならない。しかし、いざやってみるとなると、その注意の仕方によって生徒の反応や今後の姿勢が異なってくるので、これに関しては人生経験の積み重ねが重要であると感じました。

スポーツ・デイ、お疲れ様でした。それぞれの学年のパフォーマンスにおいては皆がきちんと団結し、協力しあい、かっこ良かったです。指導教員の山本先生、SOISの先生方、そして生徒の皆、この2週間を通し、貴重な経験を得ることができました。有難うございました。



## (★前ページの続き)

School in Mexico City they had a Popsicle sale and sent us \$1,000. The American School of Doha in Qatar sponsored 'Compassion Walk' and sent another \$1,000," she said.

A friend who teaches in Beijing asked her colleagues to donate the money they had raised for her retirement gift, about \$500, to the project.

The OIS community also rallied around Henbest de Calvillo. A member of the school's faculty donated all of the recorders, worth about \$3,000, and the PTA raised a further \$1,000.

Students gave up their allowances and bilingual parents spent hours translating into Japanese the more than 1,000 illustrated notes sent from students around the world.

Children's Wishes for Japan has now raised more than \$20,000. In addition to the 212 bags sent to Kirikiri Elementary School in Iwate, another 180 bags were sent later to three schools in Miyagi Prefecture.

But donations are still needed, as another 300 hand-painted bags will soon be arriving from children in Spain.

"If we had a little bit more money we could fill those too,"

Henbest de Calvillo said, adding the most essential elements of the bags are the illustrated notes from children around the world, and the messages of hope painted on the sides.

"When the kids open these bags they are going to have all these things like paints and brushes and oil pastels and origami paper. They can cut and paste and glue, which is great," she said.

"But I hope they will also think about all the people around the world who are supporting them. I hope they say, 'Wow, someone really went to a lot of effort,' and it wasn't the Red Cross or other adults, it was kids. I hope they get a kind of mental support from that," she said.

"Art really has that deep aspect to it, people can look at it and understand things that just can't be said with words."

To contribute to Children's Wishes for Japan, contact Jennifer Henbest de Calvillo at [jhcalvillo@senri.ed.jp](mailto:jhcalvillo@senri.ed.jp), or for more information visit the group's website at [web.me.com/jhcalvillo/ChildrensWishesForJapan/CWJ.html](http://web.me.com/jhcalvillo/ChildrensWishesForJapan/CWJ.html).

(Editor's Note: This project was successfully concluded in October 2011, and no further donations are needed. Thank you.)

# New Teachers

## Ms Megan Castro (ES G2)

Hello! My name is Megan Castro and I am very happy to be starting a new school year here at OIS as a Grade 2 teacher. I am from Connecticut in the United States and have taught in Connecticut, and internationally in Rome, Italy and Düsseldorf, Germany. Now, I am looking forward to an exciting year in Japan and at OIS teaching the PYP. I have come to Osaka with my husband, Isaac Driver. In addition to working with excellent colleagues in a fantastic school, we are both keen to explore and learn more about Japan. I'm sure it will be a great year ahead!



## Mr Isaac Driver (ES G3)

Hello SOIS! My name is Isaac Driver and I am thrilled to be joining the OIS faculty as the 3rd Grade PYP Teacher. My parents are from Ireland but I am from England and I have come to Japan with my wife Megan who is the 2nd Grade teacher! I have taught in London, Manchester, Rome and Düsseldorf. Megan and I are both very excited to be working at OIS and living in Japan. I have an unrelenting tendency for misguided adventure. I love exploratory travel off the beaten track, camping, mountaineering, and adrenalin sports such as snowboarding although I have sky dived and bungee jumped on occasions. I'm a soccer player and this year I shall be coaching varsity boys but I also enjoy tennis, cycling and golf. I am looking forward to a great year with grade three who are always full of energy and always have big ideas for small people! :-)



## Mr Briag Dupont (science)

Bonjour! I am Briag Dupont and I am very excited to be joining the SOIS science team. I am originally from France but I have never worked there as I left to go to university in the UK right after high school. I am absolutely thrilled to be in Japan as it has been a child's dream to live here. Most recently I was working in beautiful Bavaria, Germany as an IB teacher. I have also worked in Mexico, China and India. I often travel back to Northern Mexico if I am in need of sunshine. I am looking forward to spreading the joy and enthusiasm of science in the coming years.



## Mr Kurt Mecklem (MS/HS principal)

Prior to being appointed to Middle and High School Principal at OIS, I taught in a number of

different places including Korea, New York City, Bolivia, and Kuwait. Growing up I attended international schools in the Middle East and Europe. Before coming here I spent four years as the middle and high school principal at Cebu International School in the Philippines. I am originally from Portland, Oregon in the United States and came to Japan with my wife, Caroline and two children. My daughter Frieda is in the KB class and my son Owen is in grade 2. We are all looking forward to getting to know Japan and working with the OIS community and that of its sister school, SIS. If you see me in the hallways, please introduce yourself or feel free to drop in at the principal's office and say hello.



## Ms Kazue Sudo (Japanese)

Konnichiwa! My name is Kazue Sudo. I'm very happy to be back at OIS and work with wonderful students, families and staff again. This year, I will be teaching grades 5 – 12. I have taught in the U.S., China and different parts of Japan, and had a great experience living in different cultures and environment. Before coming back to the Kansai area, I lived in Beppu in Kyushu, one of the best towns to enjoy onsen (hot springs) in Japan. During that time, I visited more than one hundred different onsen, and got "Onsen Master" title. Besides that, I enjoy travelling, cooking and singing in the choir. I'm looking forward to sharing a great year with you all.



## Ms Rebecca Woodhouse (MS/HS physical education)

It is wonderful to have the opportunity to work at SOIS as the new Middle and High School P.E. teacher. I am extremely excited to be working with such talented and enthusiastic students. I am originally from England which is where I started my teaching career. I then went on to live and work in Saigon in Vietnam. I enjoy playing any sport, travelling and spending time with friends and family. I look forward to my first year in Osaka and getting to know the school community and learning about Japan first hand. I would like to thank you already for making me so welcome in the SOIS community.



## <夏休み短期留学> カナダの思い出

早川 遼

SIS9年

僕は、この夏休みにカナダに行きました。短期留学で一ヵ月半を過ごし、トロント大学のサマープログラムに参加しました。姉が、トロント大学に通っているのも、姉のところ滞りました。

ピアソン空港に到着してまず目にしたのはただただ広いカナダで、真っ先に感じたのは初めての国であり本当に夏休みをここで過ごすのかという心配でした。不安を抱えつつでしたが、最初の二週間はあちこちに観光に行きました。

まず、CRタワーに上りました。絶景でした。はるか遠くに見える地平線までずっと大陸が続いていて改めてカナダは広いなと感じました。

ナイアガラの滝に圧倒されました。滝の近くに行ったら体ごと吹き飛ばされそうなくらい勢いがある、怖いぐらいでした。モントリオールでは、古い建物がたくさんあって、ヨーロッパのような雰囲気でした。ダウンタウンの人々、特にモントリオールの人々は、みなフランス語と英語を話します。まず、フランス語で話しかけてきます。僕が英語しか話せないとわかったら、英語に切り替えて話しかけてきます。モントリオールはフランスからの移民の町で、町の人が自分たちのルーツを大切にしているのがよくわかりました。

またトロントでは、大リーグの試合を見ました。ちょうどヤンキーズ対ブルージェイズの試合があり、見に行く機会がありました。冬は氷点下の厳しい気候の現地では、夏の期間のカナディアン人の娯楽です。夏だけに開かれる遊園地にも行きました。初めての大会の試合観戦も遊園地もとても満喫しました。

トロントの町はとてもきれいで、近代的な建物もたくさん建っており、僕の通ったトロント大学を中心に町がつくられています。大学は、歴史を感じさせる石造りでできた建物がいっぱい建っていて、たくさんの方がここで勉強したのだなと感じました。閑学のキャンパスの何倍ものスケールで、ハリポッターが今にも出てきそうな校舎でした。キャンパスの中でリスが昼寝をしている横で芝生に座って本を読んでいる学生や、アルチメッドをしている学生や、会話を交わしながら歩いている先生や学生たち、時間がゆっくり流れていてものすごい居心地がよかったです。観光客もキャンパスに

いました。

本当に環境の良いところでした。自然もあり、車も少なく、とても静かでした。

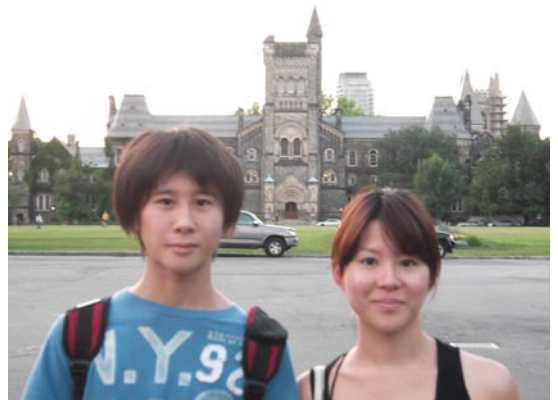
トロントは、いろんな国の人が住んでいて僕の育ったシンガポールととてもよく似ている気がしました。色々な国の料理もあり、中華料理などまるで、シンガポールで食べた味そのもので、凄く懐かしかったです。絶品でした。現地での食事に大変満喫しました。

大学に通う姉と一緒にいたので、姉の友達の大学生ともたくさん知り合いになりました。皆、自分のやるべきことをしっかりやって、課題をこなす姿勢はとても素晴らしく、遊びと勉強の切りかえが出来ていてお互いを邪魔せずにいるところは、大学生って凄いなあって思いました。お互いをリスペクトしているところは見習いたいです。

後半はいよいよサマーキャンプです。キャンプは大学の授業のミニプログラムで、僕は、フォレンジックスとデジタルメディアとビジネスを受けました。どのプログラムも一週間で完結するようになっており、毎週メンバーも変わります。何よりも大学生だけでプログラムを運営していることにびっくりしました。最初は、知り合いも友人もいなかったし、教室までの道もろくに覚えていなかったのも、毎日、自分で朝起きて目的地まで通えるかどうか不安でした。

最初の週はフォレンジックスでした。見慣れない顔を目の前に緊張しました。他の人も僕と一緒にだったので、まるで新学期が始まったような気分でした。フォレンジックスでは、犯罪学を学び、指紋や足跡や髪の毛や布地の痕跡を学んだり、血液に似た液体を作ってその痕跡の模様による犯罪の推測を学んだり、校外見学をしたり、死体の経過時間を学んだりしました。最初は、ふつうに学校の授業のようにやると思ったけれど、意外に楽しいプログラムでした。また、土曜日ではJCSA(Japan, Canada, Student Association)と言う言語交換授業を受けました。日本語と英語をそれぞれ一時間ずつランダムな人と会話するというプログラムです。大半の参加者は日本人で、黒人や白人もいました。

次の週はデジタルメディアでした。デジタ



ルメディアでは、自分でゲームをプログラムしてそれで遊ぶというもので、一日中パソコンの前に座っていました。もちろん他のプログラムと同様、毎日二、三回、みんなと外に出てゲームをして、最後はプールで遊びました。

最後の週はビジネスでした。ビジネスでは、商売や駆け引きについて学びました。毎朝、自分のパートナーと選んだ会社の業績を見て他のグループと競い合ったり、カナダでは有名なテレビ番組”Dragons Den”をまねたプレゼンテーションをしたり、実際に外に行きアイスクリームを売ったりしました。アイス売って得た利益は、youth group foundationに寄付しました。毎朝、ニュースを見て、みんなで相談してみたりもしました。

全てのプログラムを終えて日本に帰国する日が近づいてくるにつれ、あっというまだったなあと感じました。授業の始まりは緊張していて正直あまり気が向かなかったけれど、友達もできて授業がますます楽しくなっていました。日本人は僕一人だったけれど、カナダ人、中国人、インド人、ルーマニア人、韓国人、アメリカ人やパキスタン人と友達になり、グローバルな環境でした。お互いの文化に触れあったり、遊んだりして、大変楽しかったです。また、日本の東北大震災のことを聞かれたり心配してくれたりして、世界が身近にあるなあと確信しました。今回の短期留学で英語を学んだのと同時に、友達も出来ました。知り合った友人とはキーポイントで、また世界のどこかで再開できますように。この体験をさせてくれた両親にも感謝です。お姉ちゃんありがとう。

## <夏休みホームステイ> 繋がる国 ベトナム

松山紫乃  
SIS11年

近年、国際化やグローバル化などの言葉をよく耳にするようになりました。しかし私はいつもこれら言葉を考えるとき、それは必ず自分自身が感じるものであるべきなのだと思うのです。東南アジアと言われると、もしかすると多くの人が「貧困、不衛生、発展途上」などという言葉を連想するかもしれませんが、実際、それらの言葉は決して間違いではないのです。現実問題として、今の東南アジアはこのような社会的問題をたくさん抱えています。教育システムもまだ十分ではなく、また国民の所得から見ても彼らの生活は裕福だとは言えません。しかし東南アジアの人々は、欧米諸国などとはまた違った、「温かさ」というものを持っています。それがきつと、国内での活気の原動力になるのではないのでしょうか。

私がこのようなことを考えるようになったのは、今年の夏のベトナム旅行がきっかけでした。私は今年の夏、ベトナムで約2週間ホームステイしていました。そもそもベトナムへ旅に出ようと思ったきっかけは、自分の新しいフィールドとしてアジアの世界を見てみたいというごく単純なものでした。そして私は新しい世界や価値観を見つけに行くためという目的を持って、一人でベトナム旅行に行くことを両親に許可してもらいました。

私が滞在していたのは、ベトナムの南部に位置するホーチミンという都市でした。インドシナ戦争後、ベトナムは南北に分割されました。その後、ベトナムは統一をめぐるベトナム戦争で約五百万人以上もの犠牲者をだした上で、ベトナムはベトナム社会主義共和国として統一されます。しかし、その後もしばらく続いた共産主義と資本主義の対立によりベトナム国内では今でも北と南で大きな違いがあります。現在では、当時自由主義側であった南部のホーチミン市が国際的商業の都市なのに対して、共産主義側だった北に位置するハノイ市は文化や学問、政治などの都市とされています。

約2週間の間、私はホーチミン市であるゴク(Ngoc)さんと言う方のお家で、ゴクさんの家族と一緒に生活していました。私が今回の旅においてこだわったのはこの「ホームステイ」という点です。ホームステイというのはその国の人たちの本当の暮らしに実際にお邪魔させて頂けるといってその国その

ものを知る上では絶好の機会なのです。そして私は初めて「カルチャーショック」というものをベトナムで感じました。

私がベトナムに着いて初めて感じたことは、正直なところ「汚い」ということです。東南アジアは初めてだったこともあり、そこで受ける衝撃は非常に大きいものでした。

しかし、この汚さの中から彼らの文化が見受けられます。マイペースに生きる彼らにとって、お行儀やルール、規則などという私達にとっての常識は通用しません。食事のげっぷは当たり前、食ベカスなどは机の上において、また街中では平気でポイ捨てもします。しかしベトナム人、特に南部の人たちはとにかくみんな人懐っこくて、親しみやすさを持っています。ベトナムと言うと社会主義国と言うことで暗いイメージを持つ人も多いかもしれませんが、けれど実際に彼らは、日本人以上にお笑いや噂が大好きで、みんな時間があればずっと口を動かして喋っています。よく食べ、よく呑み、そしてよく喋る彼らの中にいると、自分が彼らにとって他国の人であるということを忘れ、彼らの中に溶け込んでしまうのです。

日本では、近年個人主義でかつ生活の効率化が進んでいき人々との繋がりと言うものが薄れてきているように感じます。便利になることばかりを求めすぎた日本では、人との繋がりと言うものが邪魔になってきているのかもしれませんが。しかしベトナムでは何か行事ごとがあれば、家族で、親戚で、近所で集まりみんなで祝います。こういった人との繋がりの中に生まれてくる温かさというものが、ベトナムの人々にとっての原動力になっているように感じました。また、そこから繋がっていく人との輪の中で、個人商店が多いベトナムでは商業が発達しているのかもしれませんが。一つ例に挙げると、ベトナムでは日本の昔と同じように、個人商店では値切って買い物をする。実際に、私も町でたくさんものを値切って購入しましたが、この値切りというものは面白いもので、ここからコミュニケーションが生まれるのです。「どこから来たの?」「ベトナムでなにしてる?」などと値切り交渉を



していくうちに会話が弾んでいきます。この中で生まれるこのようなコミュニケーションは、最近の日本ではあまり見受けられないように感じます。オンラインショッピングなどはこのような交渉の反例として良い例ではないのでしょうか。自分でお店に足を運ぶ必要がないため、簡単に購入することはできますが、そこからは何の繋がりも生まれません。このようなことが進んでいく社会からは、「活気」というものは消えていくのだと思います。現在ゆっくりとではありますが、少しずつ経済力を伸ばしてきているベトナムの活気やパワーの源なのかもしれません。

私はこのベトナム旅行を通して、普段の日本での生活の中で忘れてしまっていることをたくさん思い出させてもらいました。ベトナムのホームステイ先で食べたご飯は、決して豪華なものでも贅沢なものでもありません。ただ、大きいお皿に1つのおかずとお釜に白いご飯と、それからお鍋にスープが入っているだけです。それを家族全員で囲んで、箸を突っつきながら食べます。なぜそんな素朴なご飯が、あれほどまでにおいしいと感じたのかを考えたとき、やはりそれは家族の温かさだと思いました。私がお世話になったゴクさんが言っていたのは、「ベトナムの人は政治や経済にはあまり興味がない。なぜなら彼らはその仕組みがあまり分からないから。だけど彼らはおいしいご飯や家族、周りの人を大切にする。なぜならそれは何よりも身近なものだから。」もっとも当たり前なことのはずなのに私達日本人は「人の温かさ、人の繋がり」というものを見失っていたのかもしれません。そんな中で、ベトナムと言う国は一体本当に大切なものは何なのかを教えてくれる優しい地であるように思います。

# 平和と教育・10

## 「構造的暴力」と「文化的暴力」～「フクシマ」の例から

野島大輔  
SIS社会科

平和学では、世界にある様々な暴力を、①直接的暴力(内戦など武力紛争や、テロリズム・国家テロリズムなど直接に物理的な危害を加えるもの)、②構造的暴力(飢餓、貧困、差別など社会の不正なシステムが弱者を痛めつけるもの)③文化的暴力(選民思想、女性蔑視、劣等民族観など、直接的暴力や構造的暴力を生みやすくする、伝統や宗教などの一部に含まれる考え方に分類し、それらの極小化(できる限り小さくすること)を学問の目標としています。

本誌『インターカルチャー』がまだ手刷りだった頃、保護者の方から「原子力発電は果たして安全なんでしょうか、OIAの先生、お答えください」という一通のご質問を拝受し、当時の編集の方のご指名によりそのお答えを投稿させていただきました。そのお答えの文章が、たしか小生の『インターカルチャー』への初寄稿だったと記憶しています。1980年代後半、特にチェルノブイリ原発事故(1986年)があってから以降、原子力発電の問題が日本国内でも大きな社会問題になっていたときです。教室では、「原子力賛成 vs 反対のディベート」が盛んに実践され始めた頃で、小生も教員になって初めて実践してみたディベートの授業がそのテーマでした。そして『インターカルチャー』にも、いわゆる「賛否両論」について文献を紹介しつつ、無難にお答えを書かせていただきました。しかし3.11を経験した今となっては、何と生温いことをしていたのだろう、と後悔しています。

「それでも原発は必要、という人には、では自分の住む町で進んで原発を引き受けるかどうか、聞いて御覧なさい」

これは、本年9月のグローバル教育学会

(於・愛知教育大学)での、ある重鎮の教授からの提案です。部落解放研究所は以前から、国内の原発の7割が被差別部落かその近辺に法的に立地していることを統計で示していました。フォトジャーナリストの樋口健二さんは、原発の作業の下請けをしている労働者の現場の惨状や待遇の問題を、数十年にわたって訴え続けて来ました。立命館大学国際平和ミュージアムの安斎育郎・名誉館長は、東大・原子力工学科の1期生の中で唯一原発に反対していたため、研究妨害や行動監視など、あらゆる種類の嫌がらせを受けてきたと告白しています。原子力産業の主な推進者は、既に利権を失った旧・台湾総督府を管理してきた一族のたどり着いた先、と指摘する作家もあります。仮に事故を起こさずとも、競争のない独占企業のスタイルの温存に成功してきた電力会社の大名商売や、日本列島の住民たちの「豊か」な生活は、こうした国内での差別、「構造的暴力」の上に成り立っていたのです。

公共事業、道路、電気、…日本国ではこれらは一部の人々の「利権」でした。国鉄や電電公社は分割されましたが、エネルギーの分野では、プレイヤーばかりでアンパイアが居ない、対米戦争、公害、薬害エイズ、住専の破綻、などを招いたのと同じ「旧い日本」のシステムが、まだ残されていました。たとえば本稿執筆現在、国会で問題になっているのは、東京電力による賠償の手続きの内容です。100ページ以上にわたる資料の最後に、このお金をもらったら今後一切異議は唱えません、との意味の書面へのサインが求められているのですが、これは半世紀も前の、水俣病の被害者への賠償の際に、後に「屈辱契約」と呼ばれることとなる一時見舞金の手続きの残像を、いま再び見ているかのようです。

人工衛星から夜の地上を撮ったときに、国土全体が不夜城のように輝く日本列島の姿を写した写真はあまりに有名ですが、日本一国で世界のエネルギーの約1割を消費しています。(自販機と、ファクスなどの待機電源で、それぞれ原発約1基分以上のエネルギーに相当するとのことです。)日本の電力会社が国連の決議で禁輸の対象であったナミビアのウランに触手を伸ばした事件や、日本の放射性廃棄物の投棄計画を聞いた太平洋島嶼諸国の政府高官らが、「害がないならなぜ東京湾に捨てないのか」と抗議した事件は、世界的に知られています。原子力産業はこうして、世界大の「構造的暴力」の上に造られても来たのです。

「私たち(電気消費者としての日本列島住民たち=西日本を含む)は果たして、被害者ヅラして居られるのだろうか？」

これは、平和学のある大学教授の言葉です。電力会社やそれを取り巻いてきた「電・産・官・学複合体」によるこのような「構造的暴力」が長らく温存されてきたのは、多数の一般国民による積極的・消極的な支持があったことでした。

1980年代のいわゆる「原発論争」以降、原発推進勢力は積極的に原発の長所をPRする戦略を大々的に開始し、高額な費用をかけて宣伝を行うようになります。教科書や副読本ばかりではなく、SIS(当時OIA)にも、エネルギー教育や環境教育を名乗る聞いたこともない団体から、教科書や地図帳よりも立派な装丁のフルカラーの分厚い資料や教材が、次々と無料で送り届けられていました。誰がこんな多額の資金を投じて作って配っているのかと思い、小生は電話でこの団体のスポンサーについて質問をしましたが、明解な答えは帰ってきませんでした。「プルくん」という子ども向けの原発「啓発」用のアニメ(さすがにその後廃版にされたようです)は、今でも教育関係者の間で語り草ですが、登場する少年がプルトニウムをコップで飲みほすシーンで有名です。かわいいキャラクターの「プルくん」が、「ボクは身体に吸収されないから飲んででも平気」「悪者はプルトニウムの恐ろしさを大げさに言うんだ」と子どもたちに語りかけます。

「核兵器の製造と原子力発電とは基本的に異なる技術である」



<NASA Earth Observatory (<http://earthobservatory.nasa.gov/>)から編集、2011年10月訪問>



＜荒廃した津波被災地と、復興のため働く人々。2枚とも現地ボランティア活動中の河合計幸氏の提供＞

「人間はそもそも日々放射線を浴びている(自然界の放射能と人工の放射能とが同種であるとの前提)」

「核種によらず、放射線の人体への影響度は線量で測ることができる」

「半減期の短い物質の放射能はすぐに消えてしまうので害が少ない」

「放射線の線量は簡単なガイガーカウンターがあれば計測することができる」

「線量が少なければ放射線を過度に恐れることはない」

「万一事故があっても放射能が原発の容器から漏れることはない」

「万一放射能が発電所から外部に漏れても、大気や海の中で薄まってしまう」

「原発は火力・水力などに比べてコストの安い発電方法である」

「原発が無ければ日本の電気エネルギーを全てまかなうことは不可能である」

「原発はCO2を出さないので地球温暖化の防止に貢献する発電方法である」

「日本の地理的環境は自然エネルギーによる発電方法には適さない」

…これらすべてが、まったく誇張された見解であるか、少なくとも議論の余地がある論題であることは、昨今の報道でご存知の方が多くと思います。チェルノブイリ事故の事後評価や、被曝食品の安全度などについても、推進勢力による情報独占の上で作られた従来の基準や算出式そのものが誤りであるとして、特に個人研究者や海外の研究者らから異論が提示されています。

しかし、これらの見解の問題点はすべて、既に1980年代当時には提示されていたものばかりです。今年6月の国際理解教育学会のセッションでは、当時の教材で今もじゅうぶんに使えるものがあることが、話題となっていました。裏を返すと、社会問題として原発を取り上げる教材も当時からあまり進歩しておらず、これでは教育界にも相当の怠慢があったということになります。というより教育界は、一部の熱心な取り

組みを除いて、原子力は安全で信頼に足る安価なエネルギーである、との「文化的暴力」の流布に、むしろ加担していたことにもなりましょう。

「原子力賛成 vs 反対のディベート」は、いま思うに、教案としては大失敗でした。結局は科学好きな生徒たちの独壇場になることが多く、彼らは突き詰めると原発の推進勢力によって用意された本やネットの「虎の巻」を朗読するだけで、生徒たち自身の思考がほとんど深まらないのです。「ディベート甲子園」でも取り上げられたこの論題は、一見「中立的な」論題に見えますが、原発や放射能に関する情報が独占されており、論ずる主体である日本国民の多くが「構造的暴力」と「文化的暴力」と自ら様々に関わっていたという背景を踏まえると、決して「中立的」ではなかったのです。

「原発の議論は感情を排して科学的な根拠を元に行わなければならない」

「仮にも政府や公権力が責任を持って示しているデータを信用しない態度は良くない」

「日本人にはヒロシマ・ナガサキの核アレルギーがあるためか、放射能を必要以上に怖がりすぎである」

…これらは昔も今も、原発推進勢力(石川柚夫氏、加納時男氏、諸葛宗男氏ら)の「決め台詞」でした。それぞれ個別に聞くともっともなことに聞こえますが、今となっては権威主義的な恫喝とも映ります。独占企業であり続けることができた電力会社と、そこから献金を受ける地方・国会議員、そこから研究費を受ける科学者、それに寄りかかる産業界、それと系列関係にあるマスコミ、そしてその宣伝役となっていた学校、…これらが結託しているシステムがあるからこそ、上の3つが「決め台詞」として成立していたことを見抜かなければならなかった。情報を独占している「専門家」たちに従属しながら、自然科学で安全か危険かを人まねで論じるのではなく、権力と科学との

結びつきをむしろ問い疑うことが常識となっている社会科学の力で、原子力という特殊な産業を過去と未来の視点からしっかりと見なければならなかった、…これが小生の後悔です。

今年のSIS10年生の授業では、環境保護団体ワールド・ウォッチ研究所のレスター・ブラウン氏によるビデオを見ています。ブラウン氏は、日本列島には約一万ヶ所の豊富な温泉があるのに、そ

のエネルギーをなぜ使わないのか、と指摘し、大生産・大消費のやり方を卒業した新たな文明を築くために、『プランB』(ワールドウォッチジャパン刊)を推奨します。同じ火山国のアイスランドは、地熱と水力とでエネルギーの80%をまかっています。同じ海洋国のポルトガルはエネルギーの60%が波力によるもので、これらの技術は日本国内でむしろ先行していた分野だそうです。日本国民は(様々な情報統制や圧力の中に置かれていたとはいえ)、なぜか原子力をわざわざ選んで、ついに「直接的暴力」の酷い目を見たこととなります。

さて、今年6月に大阪で開かれた、石橋克彦教授(地震学)の講演会によると、浜岡原発(小生が学生のときに友人たちとキャンプに出かけて偶然見つけて、こんなところにあるのか、とびっくりしました)の次に最も危険な日本国内の原子力発電所は、世界一の原発密集地帯である敦賀原発群とのことでした。そこには活断層があり、津波の記録があり、福島原発の次に古い型の原発があり、火災が起きれば消火が極めて困難なナトリウム(水と反応すると爆発する)の冷却材を用いた高速増殖炉の「もんじゅ」があります。もしも放射線が漏れれば、琵琶湖が汚染され、飲み水を奪われた京阪神では生活ができなくなる、今後いつそんな災害が起きてもおかしくない、…とのことでした。

石橋教授は、「フクシマ」の6年前に国会の場で、大震災と津波により冷却系等の電源が失われた4つの原発が重大事故を起こす、との詳細な予測を披露していたことで知られています。石橋教授の予言がもう二度と的中しないことを、これまでどおり、「旧い日本のシステム」に任せてただ祈るだけでよいのでしょうか。本当に必要な教育プログラムとは、どんなものでしょうか。

20年前の拙稿の痛恨を踏まえて書かせていただきました。読者の皆様のご提案を歓迎いたします。

# ■ 学年だより Grade Reports

## ●OIS Grade 4

### Collaboration in Action

Lora Vimont

Grade 4 Teacher

Collaboration in Action: OIS Grade 4 and SOIS Children's Literature Class Project

Two classes at the Senri and Osaka International Schools of Kwansai Gakuin have joined together this year to work on an exciting literacy project. SOIS students from Mr. Avery's Children's Literature class and Mrs. Vimont's Grade 4 class have already met twice in this 4-session project focusing on reading and interpreting the works of children's author Chris van Allsburg. So far, the students have had the opportunity to work on their creative writing skills and freeze-frame process drama scenes using events from the stories. By the end of this project, the SOIS students hope to utilize their new knowledge of quality children's literature to write their own stories to share with the Grade 4 students. The Grade 4 students, in turn, will give constructive feedback to the older students in order that they may become better writers. This continues to be a fun and rewarding project for all!

## ●SIS Grade 7 中等部1年生

志垣満理

2組担任、生活科学科

夏休みが明けて、様子見の春学期とは一味違う秋学期がスタートしました。春学期中の大変動を夏休みの間にゆっくりと消化し、少し自信をつけ、SIS生の顔になってきたように感じました。学年ではクラスの役割として、学年の新聞を発行するPR委員やLHRに時間の企画をするLHR委員も作られ、少しずつ自分たちの力で何かをするという取り組みも始まっています。第1号の新聞の出来栄はいかがだったでしょうか？さらに、秋学期と言えば、最大の行事はSports Day！（このインターカルチャーが出るころには、既に終わっていると思いますが…）MSは8年生を中心に、クラスの枠を超えて4つのハウスに分かれて活動します。ハウスごとの色も決まり、LHRの時間を使って、応援グッズやポスター、玄関のデコレーション等、準備の方も着々と進んでいます。何をしたいのかかわからず始まっ

たハウスごとの準備も仕事を与えられると一生懸命手伝い、放課後はパフォーマンスの練習と忙しいながら、楽しそうに参加している7年生の姿は実にほほえましいです。クラスや学年の枠を越えた色々な形の交流がそこにはあり、それが、この学校の良いところです。自分のHRはHRとして、常に存在しますが、クラスにこだわらず、どんどん新しい関係や活動の場所を見つけていってくれるといいなと思います。こんなに個性豊かな人たちが集まっているのですから、素通りなんてもったいない！少しずつ慣れて余裕も出てくる頃ですから、少し顔を上げて周りを見回して見て下さい。面白いなと興味を引くものや人に出会えるかもしれません。よく学び、よく遊び、これからどんどん表情を変えてゆく7年生、SISでの今の時間を大切にどんなSIS生に育っていかれるのか、ますます楽しみです。

## ●SOIS Grade 8

### Grade 8 Ceramics on Display

Jennifer Henbest, Christopher Meadows  
Visual Arts

Toward the end of the last year, the



SOIS Grade 8 Art students were busily putting the finishing touches to their ceramic/drawing project. This marked the culmination of a very busy year that saw them working both individually and in groups with a variety of art mediums.

Their final major project involved the students investigating a person they admired (either from the past or present), then representing their qualities within the form of a ceramic piece. As part of their investigation they sought to identify the admired person's achievements, while also finding significant quotations that could be used as inspiration for a three dimensional form.

Each student worked independently to plan and design the structure and colour decoration. In the process they also learnt

much about clay as a medium, construction techniques and glaze application methods. The final piece was accompanied by a portrait drawing completed in graphite pencil that included a chosen quotation. The diversity of ideas and presentation style was quite extraordinary and continues to show the creative ability of our students.

A display of their works can now be viewed on level two of the SOIS campus.

## ●SIS Grade 8 中等部2年生 一歩踏み出す勇気を持つ

田中憲三

2組担任、数学科

8年生には秋学期より3名の編入生を新たに迎え入れました。1組に竹田義人君、2組に加々尾柚花さん、3組に田中沙宝さんです。本校特有のシステムに慣れるまでは大変でしょうが、あせらずに級友や先生たちの助けを借りてゆっくりと馴染んでいってくださいね。これで8年生は全員で68名になりました。

さて、この10月で、中等部での3年間のちょうど半分が終わったこととなります。今まで何もかも初めてということで、これまでいろいろな活動に積極的に参加できなかった人、様子見だけで終わってしまった人もいるでしょう。また、本校では自らが行動を起こさないと何も始まらないということに、みなさんの多くは気がついていていると思います。「いっしょにしてくれる友達がいたらやるのだけど…」と思いながら、なかなか最初の一步を踏み出せなかったみなさん、中等部の残りの半分では、自分のやりたいことにどんどんチャレンジして欲しいと思います。各クラスでの委員会活動、各種クラブ活動や、音楽のリサイタル、オールスクールプロダクション等々、いくらでも活躍のチャンスがあります。

8月から9月にかけて、数名の本校卒業生と話をする機会がありました。本校での思い出話になると、話題は尽きることはありませんでした。目を輝かせ、温和な表情で話すその姿を見ていると、本校での毎日の生

SOISとは、関西学院千里国際キャンパスの2つの学校をまとめて表した Senri & Osaka International Schools of Kwansai Gakuin の略称です。

活が彼らにとってのかけがえのない宝物になっているのだなと感じました。是非みなさんにもこれからの学校生活で、たくさんの宝物を見つけて行って欲しいと思います。そのために今必要なのは、一歩踏み出す勇気だと思います。がんばってください。

●SIS Grade 9 中等部3年生

Grade 9 trip to Mie-ken  
Rodney Ray

9-2 HR Teacher, English

On Friday September 30, SIS Grade 9 went on their grade trip to Shima, in Mie-ken. We stayed at Nemu-no-sato Resort. Itoh-sensei joined the homeroom teachers as a chaperone.

Grade 9 prepared for this trip for several weeks. The Trip Committee members (with a lot of help from Kano-sensei!) did a very nice job organizing the trip location, the trip booklet, bus and hotel seating, and recreation activities.

On the first day, we were afraid that the weather would be bad, but as it turned out, it was quite summery for most of the day, only sprinkling a very little bit in the early evening. Our first activity upon arriving was to prepare lunch and haul in

the day's catch. Students took turns pulling up the pots/nets, and upon returning to shore, everybody help to prepare the scallops and crab for the meal.

In the afternoon, students divided into smaller groups for a variety of activities: some went bicycling, some fishing, some did archery, and others went sea-kayaking. In the evening, we played "Russian roulette" with some loaded Oreos, along with some other activities.

The next day was bright and cooler – perfect fall weather. We spent the day at Parque Espana, where the students enjoyed many different kinds of attractions.

The goal of our trip was to "deepen our connections" to each other, and I think this goal was well met. Overall, the students cooperated with each other, got along well, and had lots of fun! It was a good experience for our grade to work on organizing this event, because we will soon have another big event to organize: our graduation ceremony!

Many thanks go out to Kano-sensei, who guided the Trip Committee, Hasegawa Natsuko-sensei, who gave us guidance on staying healthy, Itoh-sensei, who

joined us on the trip, and of course the Trip Committee members, who worked hard to make the trip go smoothly.

●SIS Grade 10 高等部1年生

この一瞬に情熱を

井上

2組担任、国語科

私たち10年生は秋学期より10名の生徒が留学・転学で学校を離れた一方、坂上英さん・山本梨奈さんの2名を編入生として新たに迎え、総勢74名でスタートすることになりました。学校行事や授業を通してまた新たな10年のカタチを作っていくてほしいと願います。

さて、生徒の皆さんは長い夏休み、どのように過ごしたのでしょうか。先学期末、私は夏休み中「生活習慣を乱さないこと」そして「有効に時間を使うこと」が大切だとお話ししました。毎日学校に来るということがなく、生活・学習ともに自分の力でコントロールする必要があったと思いますが、皆さんの自己評価は何点でしょうか。

高校生ともなれば、生活・学習両面において周りから指示を受けなくても、自己管理をしていくことが次第に要求されてきます。生活習慣が乱れると、やる気やモチベーションの低下など全ての乱れにつな



SIS Grade 9 trip to Mie-ken

がります。これからも、平日の家に帰ってからの時間の使い方、普段の週末の休日の過ごし方も含め、自分の生活習慣が崩れていないか注意して生活してほしいと思います。迷走しそうときは、そう、SISに入学したころの「初心」に立ち返ってください。

「初心を忘れるな」——今や使い古された常套句に聞こえますが、私はこの言葉を聞くと「守破離」ということばを思い出します。難しいことばですが、これは日本の武道・芸道において初心者が名人にいたる道筋を表したもので、「初心者は型を守れ、上手は型を破れ、名人は型を離れよ、しかしそのときも型を守る心を忘れるな」という教を説いた格言です。

SISに入学した時期に関わらず、10年生の皆さんは学習面においても、生活面においてもまだまだ「高校初心者」の域を超えてはいないと思います。まして、高校1年生の半ばといえば、SIS高等部の6分の1しか終わっていません。まだまだ何事も「型を重んじ、基礎を固める」ことに力を注ぐべき時期なのです。自分で勝手な判断をして、型を破り始めてしまいがちな今だからこそ、再度初心に立ち帰り、周囲の意見に真摯に耳を傾けながら、しっかり生活・学習基盤を固めてほしいと思います。

夏休み中、私はとある書写展に立ち寄ったとき、次の和歌の作品に目がとまりました。

「明日あると 思う心の 仇桜 夜半に嵐の 吹かぬものは」

実はこの和歌、仏教でおなじみ親鸞聖人が9歳のとき、出家を決意して訪れた寺で「(日も暮れたので)出家を明日にしてはどうか」と促されたときに詠んだ歌です。皆さんはこの歌を詠んだ彼の気持ちがわかりますか？

今のこの一瞬は一度きりで、二度と戻ってはきません。SISでの1つ1つの授業も、行事も、友達との何気ない会話も、家族と過ごす時間も。そして、これらに「次」はないかもしれない。大げさかもしれませんが、いつ・どこで・だれに「万が一のこと」がないとも限らないのですから。そして「万が一のこと」があった時、きっと人間は大切に過ごさなかった時間を後悔の念を持って振り返るのだと思います。特に私たち日本人は今年3月の出来事を目の当たりにし、このことを痛切に考えさせられました。

だから、この一瞬に全てをかけて、後から何があったとしても、どのような結果が生じようとも「あの瞬間に自分は全力を尽くした！後悔はない！」と自信を持って言えるような、そんな1日1日を過ごしていつほ

しいと思います。今年ももうすぐスポーツデーがやってきます。最初で最後のスポーツデー2011。今この一瞬一瞬に「Passion—情熱—」を注いでください。

●SIS Grade 11 高等部2年生  
Frances Namba

11-4 HR Teacher, English

“The only way to do great work is to love what you do. If you haven’t found it yet, keep looking. Don’t settle. As with all matters of the heart, you’ll know when you find it.” Steve Jobs

As I write this gakkunen dayori the world is talking about the premature death of Steve Jobs, the founder of Apple. He is being hailed as a genius, a visionary, a man who changed our world. His words of inspiration are being repeated in the media and seen as having important lessons for us all. For grade 11 students who are at a time when important decisions about your future are about to be made, the quote above from Jobs, in particular, stands out as being relevant.

Jobs’ advice is to find something that you love doing. Have goals in life, a sense of purpose, meaning, and do something which gives you satisfaction. As you continue researching the paths that are open to you after SIS, keep this advice in mind.

In an interview, Jobs explained how, after dropping out of college, he decided to do something totally different, and enrolled in a calligraphy course. He found that he was fascinated by the beauty of the different fonts and styles and loved the course even though he thought it would be of no use to him in his life. But ten years later, when working on the first Macintosh computer, Jobs remembered what he learnt all those years ago and the Mac became the first computer with beautiful typography. Thanks to Steve Jobs dropping out and taking that calligraphy course, we all have a wonderful choice of different fonts on our computers today.

So the message is that we can never tell what will or will not be of use to us in our futures. If you can’t yet answer the question “What do you want to do in your life?” don’t worry! Be open-minded and flexible, be a risk-taker, try out many dif-

ferent activities and courses, you never know what you might discover about yourself!

I believe that many grade 11 students are actually already doing this. There really are many activities going on in school at the moment and our students seem to be involved and leading most of them. 17 grade 11 students took part in a grueling 3-day trip to Tohoku to help the victims of the tsunami. I am so impressed by the dedication and determination they showed in this and the fact that after a full day of travelling and working, many of them stayed up until the early hours of the morning to finish their school homework!

We homeroom teachers are getting only positive feedback about this grade and we are very proud of the wonderful role models they are for our younger students.

Another big event for us is the school trip to Taiwan. The dates have changed slightly from those on the calendar, so please notice that we will leave on March 15th, one day earlier than originally planned, and return 4 days later on March 19th. Please make sure that your passport is valid as soon as possible; with the school year already over half way through, time is flying and we will be taking off to Taiwan before we know it!

＜秋学期帰国生紹介＞

2011年度秋学期入学者  
在留国別、学年別人数  
入学広報センター

《 国別 》

アメリカ	4
中国	1
国内(インターナショナルスクール)	1
計3ヶ国	6

《 学年別 》

8年生	3
10年生	2
12年生	1
計	6

## ●SIS Grade 12 高等部3年生

## One Step Closer to the “Freedom” of College Life

Shammi Datta

12-1 HR Teacher, Social Studies

SIS seniors are currently busy preparing for three things:

1. University applications
2. Their final term as high school students - the 18th term
3. The last sports day of high school.

Seniors have thought about their future from various angles, talked about it with different people, researched many universities and decided where to apply. The homeroom teachers and everyone in the school community wishes them the very best in this important phase of their lives.

The upcoming 18th term, the last term of high school life at SIS, presents some additional opportunities and privileges. The seniors can choose individual senior research, community activities and some courses which are only offered in the 18th term. Moreover, this term has a different set up. For example, the daily homeroom is during the noon flex time, which means you may not need to come to school at 8:30am everyday. At colleg-

es, there will be no morning HR, and each individual is responsible for maintaining their own daily rhythm. Simple things like waking up time, sleep hours, meal times, etc can easily go out of control with the “freedom” of college life. This is particularly true in the age of web-based assignments, social networking sites like facebook, and 24 / 7 internet connectivity through smart-phones, laptops and tablets. At KG SIS, the 18th term is an opportunity for each senior to self-manage simple daily rhythm things and prepare for college life. How well you do that is largely up to you.

(Please refer to the 18th term sheet for further details.)

The final sports day of high school and graduation ceremony preparation are also upon us. I hope the final months of high school life are memorable and meaningful for each SIS senior.

日々是一期一会

松島 勇

2組担任、国語科

今年も、例年同様にセンター試験の出願を終えました。現在の進路の状況としては、指定校推薦の選考、AO入試の結果が出て、次に始まる公募制推薦に向けた準備

が始まっているところです。今年のセンター試験の出願は、今までと違い受験する教科数も予め登録する形になりました。進路として受験票の記入の仕方について説明する際に、去年との違いをどう説明しようかと思っていた時に、今の高3生にとっては今年が初めてのセンターなので、去年との違いの説明は特に必要ないということに気が付きました。去年を体験していない生徒に今年はどう変わったと説明するのはあまり意味がないのです。進路として毎年センターの出願を取りまとめているので、去年との違いが気になってしまい、どう説明したらわかりやすいかなどと考えてしまったのです。敢えて説明する必要はないと気が付いた時に改めて考えたことは、教員として毎高3生を教えているうちに、無意識に今年も「高3生」という見方をしてしまっていたのではないかとということです。毎年と同じように高校3年生がいますが毎年毎年の、一人一人にとっては、最初で最後の高校3年生活なのです。同じ意味で、今度のスポーツデーもこの秋学期の日々もそしてSIS最後の18学期も最初で最後のものです。そのかけがえのなさを念頭に置いて、この日々、この瞬間をお互いに大切にしていきたいと思っています。

## 中庭リニューアルオープン



10月17日(月)朝のSHRの時間に全校生が集まって中庭リニューアルオープンのセレモニーが行われました。High School 生徒代表とElementary School 生徒代表がテープカットをし、養生中だった芝生に記念すべき第一歩を記しました。

(撮影: 斎藤数)

# 中国語コンテスト最優秀賞

四川省重慶での世界大会に参加決定！

中嶋かり  
中国語

6月に立命館大学で行われた第4回「漢語橋」世界中高生中国語コンテスト西日本地区予選に12年生の小野茜が参加し、満点に近い得点で見事最優秀賞を獲得しました。審査委員の方々がネイティブに近い発音で感情を込めたスピーチだと評していました。10月14日から中国四川省の重慶での世界大会に参加する予定です。その大会でたくさんの人と出会って、切磋琢磨を重ね中国語の学習のみならず、いろいろな面で役に立つように祈っています、是非頑張ってください。本当におめでとうございます。

3月の東日本大地震で延期になりました、第74回日本中国語検定試験が6月に行われました。12年生の福岡あゆ、準4級、4級ともに合格しました。藤原若葉、準4級、4級ともに合格しました。11年生の高原麻実、4級を合格しました。さらに10年生の北川京香が2級を合格しました。四字熟語や難しい言い回しも頻繁に出題するので長文の読解が難しかったと思います。以上の皆さんおめでとうございます。

SISの小野茜をはじめ、小西里佳、田中輝樹、福岡あゆ、三好会里香、井山賢人、池上奈津代、松本渚、中島彩花達が春学期から計画を練って、中国大使館と民間団体との間で奔走し、中国上海から高校生15名を招き、大阪の観光や日本の高校生と交流など、まだ両国の歴史や社会、政治などのテーマについて議論する会を立ち上げました。短い4日間でしたが、とっても大きな成果を得ることが出来ました。中国の高校生たちも違う角度から中日の歴史、社会に触れることにとっても有意義だと話していました。



## 韓国語検定合格

白 善暎  
韓国語

アンニョンハセヨ。6月に行われたハングル能力検定試験で11年の廣澤沙希さんが5級に合格しました。おめでとうございます。次は来年4級と3級をがんばってください。11月の試験にもたくさんの学生が挑戦します。みなさん！アザ！アザ！ファイト！

# ドイツ語スピーチコンテスト優勝

大阪市の親善大使としてハンブルクへ派遣決定！

桂木 忍  
ドイツ語

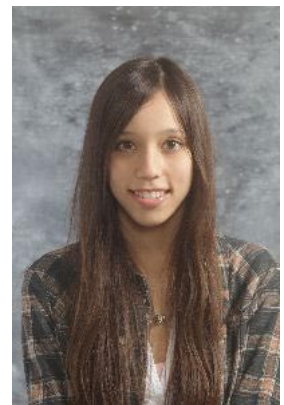
去る10月15日(土)に開かれた第22回ドイツ語スピーチコンテスト(主催 大阪・ハンブルク友好都市協会)に、SIS10年生の岩澤直美さんが出場し、10名の出場者の中から、優勝にあたる「大阪・ハンブルク友好都市協会賞」を受賞しました。

岩澤さんは、大阪市の親善大使として来年の夏に、大阪市の友好都市であるハンブルクに派遣される予定です。そのほかにも、これから一年間、ハンブルクからの公式な訪問の席などで親善大使としての役割を果たすということです。

優勝スピーチのタイトルは『自然がわたしたちにくれるもの—未来の私たちのエネルギー』です。3月に起きた震災で危

機的な状況にある福島の原因事故をきっかけに、日本での未来のエネルギーのあり方について考え、環境先進国であり、すべての原発の廃止を決めたドイツにも言及した意欲的なスピーチでした。

すばらしい成果をお祝いするとともに、大阪とハンブルク、日本とドイツの架け橋として一年間の大いなる活躍を祈りましょう！



## <英語科> 英検1級に2名合格

Eiken Report Summer 2011

Rodney Ray

SIS English

The following students have reported Eiken results to Kyoumu-bu. Special congratulations to Atoka Jo and Haruka Kaji for passing Level 1! The number of students passing Level Pre-1 was particularly high this time; good job, everybody. Finally, congratulations to OIS elementary students Suwen Shimon Pok, Airu Mukaiyama, Sophia Smith and Malka Bobrove for their great results on the test.

SIS/OIS Gr	Class	Student Name	Grade
OIS 9		Atoka Jo	1級 (Grade 1)
SIS 11 1		Haruka Kaji	1級 (Grade 1)
OIS 6		Suwen Shimon Pok	準1級 (Grade P1)
OIS 6		Airu Mukaiyama	準1級 (Grade P1)
SIS 10 4		Yuki Miyake	準1級 (Grade P1)
SIS 11 1		Naoya Sakata	準1級 (Grade P1)
SIS 12 1		Yumika Tanimura	準1級 (Grade P1)
SIS 12 1		Ayaka Fukuoka	準1級 (Grade P1)
SIS 12 2		Hiroki Matsuura	準1級 (Grade P1)
SIS 12 2		Ayu Fukuoka	準1級 (Grade P1)
SIS 12 3		Sae Okamoto	準1級 (Grade P1)
SIS 12 3		Miumi Izawa	準1級 (Grade P1)
SIS 12 3		Shun Sekiya	準1級 (Grade P1)
SIS 12 3		Natsumi Uki	準1級 (Grade P1)
OIS 3		Sophia Smith	2級 (Grade 2)
SIS 10 3		Miyu Kawabata	2級 (Grade 2)
SIS 11 1		Miki Omori	2級 (Grade 2)
SIS 12 2		Jong dae Yoon	2級 (Grade 2)
SIS 12 3		Sarina Yasuda	2級 (Grade 2)
OIS 3		Malka Bobrove	準2級 (Grade P2)



## 感染症に負けず、冬の季節を乗り切ろう！！

長谷川夏子

保健室

ここ最近、一段と涼しくなってきましたね。みなさん、体調を崩したりしていませんか？この季節、みなさんにしてもらいたい大事なこと、それは「感染症に負けない身体作り」です。感染症とはなんでしょうか？感染症とは、病気の原因になる微生物やウイルス、細菌が身体の中に入り、発熱や下痢、咳などの症状が出る事をいいます。感染症には「伝染性感染症(他の人にうつる)」と「非伝染性感染症(他の人にうつらない)」があります。どうやって感染するのでしょうか？1つ目は接触感染、菌などに汚染されたものを直接触れることで、主に口から感染します。2つ目は飛沫感染(ひまつかんせん)、病気にかかった人の咳やくしゃみを吸い込むことで感染します。3つ目は空気感染、空気中に浮遊している原因菌などに触れたり吸い込んだりすることで感染します。その他に、虫や動物が原因の感染症もあります。大切な事は「予防すること」と「負けない身体(免疫力の維持)作り」です。感染症の原因となる「ウイルス」「細菌」「微生物」などは、残念ながら見えません。そのため身体の中に、いつ入り込んだのかわかりません。身体の中に入れない、ウイルスたちに負けない身体を作るためのポイントをご紹介します。ポイントは全部で8つあります。(1)手洗い(30秒くらい、石鹸を使って手首までしっかり洗いましょう)、(2)うがい(口やのどを洗浄、自浄作用を促進

します)、(3)水分補給、(4)栄養(バランスのとれた食事、特にビタミンをしっかりととりましょう)、(5)睡眠(規則正しい生活と、十分な睡眠、休養をとりましょう)、(6)リラックス(ストレスや過労は大敵！)、(7)保温(気温はどんどん下がっていきます。寒くない服装をしましょう)、(8)保湿(冬に流行するウイルスたちは、湿度が苦手です。加湿器やマスクを上手に使いましょう) この8つのポイント、本当に基本的な日常生活や生活習慣で、むずかしくないですよ？自分が病気にかからないことも大切ですが、自分が病気をうつさないようにすることも大切です。咳やくしゃみ、鼻水が出るときなどは「咳エチケット」を守り、マスクを上手に利用してください。また、そのような症状がある人の近くに居るときは、いつもよりもしっかりと「手洗い・うがい」に取り組んでください。

しっかり予防していたはずなのに、病気にかかってしまった… そんな時に1番大切なのは「休養すること」です。お薬を飲んでも、身体を休ませなければ治りません！上でも書きましたが、自分が人にうつしてしまう事もあります。「大丈夫かな？」と思って…と、学校に出てきたものの、学校に居るうちに悪化してしまう人も多くいます。体調が悪く感じたら、無理をせずにしっかり身体を休ませましょう。また、専門家(医者)に診てもらう事も大切です！早めに対処して、早く元気になりましょう！！

## <英語科> An SIS/OIS Collaboration

Mark Avery

English

Each year, a group of high school students have the opportunity to work collaboratively with OIS grade 4 on a literary project. The SIS students are enrolled in the Children's Literature course and visit the OIS classroom four times throughout the trimester. They observe a literature class on their first visit and conduct an activity based on a book the grade 4 students have already read on the second visit. On the third visit, the SIS students choose a book to read to a small group and design an activity that focuses on one element of literature and finally on the fourth visit, hold literature circles where the SIS students read their own picture books and receive genuine reader feedback from grade 4. This feedback is real and invaluable for the SIS students who work very hard to produce a book that



will stimulate thought and discussion, and be something all the children can enjoy. The photos are from our second visit when we used Chris Van Allsburg's *The Wretched Stone*. The activity focussed on identifying important events in the plot and subsequently applying those skills to creating a storyboard consisting of 5 frozen images that tell a story. The scenes in each storyboard ended up being very clearly connected and members of the audience were eager to retell the story at the end. There were quite a few interesting body arrangements and facial expressions along the way too. We are looking forward to getting down again for activity three.



## <点字クラブ> OIS幼稚園へ点字を教えに行きました

山澤春菜

点字クラブ部長、SIS11年

10月中旬の水曜と木曜各30分間、アンスケの時間を調整して、点字クラブでOISキンダーガーデンに点字を教えに行きました。これは、OIS小学部が取り入れているPYPというプログラムに沿った活動で「触って感じる」という課題に取り組むため、日本語の授業での体験学習のお手伝いをしたというものです。

点字クラブは、毎週水曜日の放課後、図書館2階のMMラボで活動している、目の見えないお母さんが子供に読み聞かせられる点字絵本を製作するクラブです。蔵書は誰でも閲覧可能で、いくつかには絵も触れてわかるような工夫が施されています。

今回は、顧問の青山先生、副部長の垣内穂佐奈、会計の伊達碧、佐々木里菜、そして私を含めた計5人で体験教室を開きました。1日目は、青山先生、佐々木さん、私がテルミという手で見る絵本を持って行きました。園児は11人で、アイマスクと一人一冊ずつテルミを渡すと、とても楽しそうに触って

いました。中でも人気だったのがどのテルミにも入っている迷路のコーナーで、難しいと言いつつも頑張る子や、簡単にやっつけのける子と様々でした。

2日目は、点字を打ってみようということで、青山先生、垣内さん、伊達さんが点字を打つ器具を持っていき、点字とは何かを説明した後、実際にそれを使って自分の名前などを打つのを指導しました。初めてなので戸惑っていた子もいたようですが、皆楽しそうにやってくれたようです。

キンダーガーデンの子供たちと仲良くなれたり、自分で点字を教えたりすることができたりと、私は勿論皆も楽しそうにしていて、いい体験ができたと思います。



## <社会科> NIE (Newspaper in Education)

増尾美恵子  
社会科

今年も秋学期から9年生に新聞をメイン教材とした授業が始まりました。NIEです。NIEで指導したいことは、新聞力(5WIH、読解力、集中心)の3本柱を中心に新たな視点としてPISA学習を踏まえた自己実現の実践です。

中学生が現代の世相(時事が要)について新聞を教材に学ぶ。案ずるより生むがやすし、そう難しくはありません。なぜなら、新聞はいつでもどこでも安価で手に入り読むことができるからです。どの記事にしても「いつ(When)」「どこで(Where)」「誰が(Who)」そして「なぜ(Why)」「何を(What)」「どのように(How)」という構成で解りやすく書かれてあります。なによりも、子どもたちが世の中の出来事を理解するには、この6つの情報をしっかり頭に入れる必要があり、5WIHは文章や物事を理解するための情報の骨格なのです。文章や物事の道理を正しく理解することは、簡単なようで、とても難しいことです。この力を、学校では「読解力」と呼ばれています。

しかし、OECDのPISA調査でも世間的に十分な成果が出てはいないのが現状です。それも日本の学校の子どもたちは、世界のトップレベルの子どもたちと比べて「読解力」が低い割合が多いとよく言われています。

すでにプレゼン能力の高い千里国際生にさらなる学力をプラスするには、上記にも書いたように習得した知識や技能を生活の中で活用してゆくという「PISA型学力」を徹底的に会得へ導きたい、今年度からは特に強くそう考えました。そこで「新聞を先生、にして欲しいのです。授業を通じて絶えず新聞に親しむことをまずは目指します。

NIEを受講していなくとも、こんな方法もあります。自分の気に入



った新聞記事を書き写すという作業です。「自分の手で書き写す」事がとても大事なのです。なぜかは実際に書き写すとわかります。当然ですが書き写さないとわかりません。

書き写すという作業には、とても大切な副産物がついて来るのです。それは「集中力」です。教育では読解力も大事ですが集中力も同じぐらい大事です。この二つが同時に身につくのです。まだあります。漢字の読み書きの力が向上します。難しい



漢字や言葉を辞書などで自分の力で調べ知ることほど達成感が得られることはありません。中学生のころから新聞やいろいろな本を読む習慣を身に付ければ学歴にこだわることなく、自由に生きることができます。世界に羽ばたくことができます。これこそ千里国際の生徒ではないでしょうか。

あと、NIEの授業ではスクラップノートを作りコンクール出展をします。自らが新聞を読み記事を選定し、スクラップを貼ることで生徒たちがその記事をどのように調理し考察してくれるか、どのように記事から勉強してくれるか、つまり学習方法を自ら探し学ぶ力を育てたいと考えております。

最後に学期末には時事問題テスト(最大50問予定)も待っておりますのでがんばりましょう!

### 参考資料

PISA調査(Programme for International Student Assessment)とは、OECD(経済協力開発機構)が1988年よりはじめた事業である。「PISA型学力」(学習到達度調査)の特徴は次の5項目で表現できる。

- ①知識や技能を実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかどうかを評価。学校カリキュラムには関わらない。
- ②図表・グラフ・地図などを含む文章(「非連続型テキスト」という)が重視され、出題の約4割を占める。
- ③「選択式」を中心としながらも「自由記述形式」の出題が約4割を占める。
- ④記述式では、答えを出すための「方法や考え方を説明する」ことが求められる。
- ⑤読解力として、「情報の取り出し」・「解釈・理解」・「熟考・判断」、そして自分の「意見を表現する」ことが求められる。テキストの「内容」だけでなく「構成や形式」についても問われる。

## SIS学外個別教育相談のご案内

### ▼海外教育相談会11/25開催

11月25日に、ロンドン、ニュージャージー、ロス、シンガポールにて個別教育相談会を実施致します。相談会場の詳細は本校 Web Page をご覧ください。

### ▼学外個別相談会 in 東京

2011年9月より東京丸の内キャンパスにて個別教育相談を実施しています。

以上ご希望の方は入学広報センターまでお申し込みください。なお、申し込みの際、お名前、お子様の学年、希望場所(都市)をご記入いただきますようお願いいたします

E-mail admissions@senri.ed.jp

電話 072-727-5070

## <数学科> AISA数学コンペが開催されます

馬場博史  
数学科

### ■AISA数学コンペ出場者募集

2012年2月3日(金)～4日(土)(AISAバスケットボール大会と同じ週末)にSOISにてAISA数学コンペが開催されます。参加校は、ソウルインターナショナルスクール、横浜インターナショナルスクール、OIS、SISです。4名で1チームを編成。英語で数学の問題を解いて競い合います。奮って応募してください。

英語での出題に慣れるための練習として以下の①②が役に立ちます。

①ASMA数学コンテストシリーズに参加する。(下記参照)

②冬学期開講のIB Math Extraction(IVブロック月水木)を受講する。

### ■ASMA数学コンテストシリーズ参加者募集

世界中のインターナショナルスクールが参加。毎月1回、英語で出題される数学の問題を35分間で7問解きます(問題例は130号参照)。成績によって学校別に順位が決まります。10月からの毎月第2木曜(Oct. 13, Nov. 10, Dec. 8, Jan. 12, Feb. 9, Mar. 8)の6時間目または放課後に受けられます。受験料は無料。出題範囲は日本の教科書の数学Ⅱと数学B程度まで。英和辞書持ち込み可能です。

### ■夏休み大学数学公開講座に参加

▽7/30神戸大学サイエンスセミナー「相対性理論とメービウス幾何学のつながり」(他理科もあり)

### 五井達也(SIS10)

全部で5つの講演(地球惑星科学科、生物学科、化学科、数学科、物理学科)があり、その中でも僕が気に入った講演は生物学科の「放射線と生物の関係」です。今回の大震災のことについて説明をしていたので、色々と考えさせられました。ちなみに数学科の講演は「相対性理論とメービウス幾何学のつながり」というもので、ちょっと複雑でした。貰った資料があるので今度持って行きます(講師が外国の方だったので資料は英語です)。一応全部

のセミナーを聞いたので、修了証書を貰いました。全体的に見ると、高校生でもわかりやすかったと思います。

▽8/09大阪大学現代数学への冒険「オイラー数の幾何」

### 新田令華(SIS10)

最初の方とかはちゃんと理解できて「おお！」って思ったりしたんですけど、途中から全く知らん記号とか出てきて一生懸命書いても訳わからなすぎて脳みそがぼぼずっと迷子になってました。内容はそんな感じでしたけど、大学で講座を受けるのとか初めてだったんで、雰囲気とかがみれて良い経験になったと思います。来年もあるみたいなので、数学の勉強頑張ってその時はちゃんと理解できるようになってまた参加したいと思います。

### 森川巧基(SIS10)

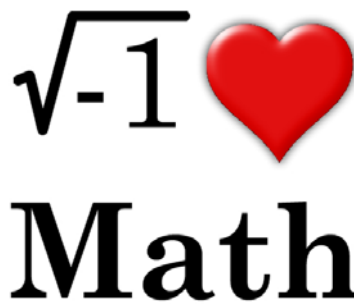
今回の講座はオイラー数の幾何の基礎の基礎の部分を説明してくれたのですが、少し難しくきちんとは理解できませんでした。しかし大学の理学部の研究はどのような感じがか拵めた気がしました。

### 小花皓朗(SIS11)

初めて聞く事ばかりで難しかったですが、来学期に選択した授業で、今回の講座で学んだ事がきちんと理解出来ると思います。早く数学の授業が始まって欲しいです。教えて頂きありがとうございます。是非また参加したいと思います。

### ■数学検定団体受検は2/3(金)に実施

数検は、合格すると調査書に記入することができ、準2級以上はSIS高等部の単位に加算することができます。出題範囲は、5級＝中学1年程度まで、4級＝中学2年程度まで、3級＝中学3年程度まで、準2級＝数学Ⅰ・数学Aまで、2級＝数学Ⅱ・数学Bまで、準1級＝数学Ⅲ・数学Cまで、1級＝大学教養程度までとなっています。年に3回の個人受検機会があります。また本校では年に一度団体受検を実施しています。今年度は2月3日(金)を予定しています。奮って受検して下さい。



## <ボランティアクラブGNS> 知らないことを知る

北嶋友香  
GNS代表、SIS11年

GNS(Glocal Network Shanti, Shantiはネパール語で“平和”という意)とは、7年生、8年生、11年生の計20名弱で現在構成されている国際ボランティアクラブです。

今年度・来年度のGNSの軸となる活動は、タイ、クロントイ地区スラムにあるドゥアン・プラティープ財団へ絵本をタイ語に翻訳して送るというものです。しかし、この活動には送料や購入代等のお金が必要なため、私たちは春の学園祭で生徒と先生方、そして保護者の方々のご協力のもと、バザーと募金活動を行いました。その結果、合計13,116円のご支援をいただきました。ほんとうにありがとうございました。

他にもGNSでは12年生の秦民文くんがタイ語を教わったり(翻訳のお手伝いもしてもらっています)、タイについてみんなでお勉強してみたりと、「知る」ということを大切に活動しています。これは、私たちがそれに対する興味や知識をもっていないからといって、決してその問題自体がないわけではないという考えに基づいています。

また、私たちは積極的に発信もしていきたいと思っています。その1つとして、19日に開催されるインターナショナルフェアでGNSカフェを出店することになりました。タイのことをみなさんとシェアするとともに、訪れてくださったみなさんとくつろいだ雰囲気のなかでたくさんお話をしたいと考えていますので、ぜひお越しください。

# 静かな図書館と賑やかな図書館

青山比呂乃  
図書館

次の写真を見てください。SOIS図書館のある日の昼休み前後と授業中の風景です。図書館には、100席余りありますが、すべていっぱいのにぎわう昼休み、空き時間の生徒が、自分の課題などに集中して勉強していることが多い、しんと静かな授業中。どちらもSOIS図書館の顔です。

図書館は、朝は始業前の8時から、夕方は下校時刻の16時半以降も残って勉強をしたいとサインアップした中高生のために18時まで開館していますが、同じ1日の中でも、大勢の生徒が行きかう昼やアンスケで生徒が多い時間帯と、授業に出席している生徒が多い時間帯では、随分雰囲気が変わるのです。まずは学校の玄関を入ったところにあるガラス張りの図書館のため、SIS/OISともに多くの生徒や幼稚園や小学生の送り迎えの保護者（登録すると中高生徒に準じた利用ができます）など、様々な人が立ち寄り利用する賑やかな図書館という面があります。

一方で、授業でも良く使われる図書館です。たとえば、高1の保健で、身の回りの危険などのテーマについて、図書、雑誌や新聞記事、ネット記事などを駆使してポスターやレポートにまとめて発表するなど、何らかのリサーチ・課題解決を目的とする授業や、OIS小学校を始めとして、毎週1回図書館に来て、物語を聞き、自分で読む本を借りていくクラスや、学期に数回、あるテーマの図書を探しに来て、各自が選ぶというクラスなど、さまざまな形の利用があります。

生徒の個人利用の仕方も、様々です。絵本に始まり、お気に入りの物語を次々借りて読む。友達と一緒に広いテーブルでノートや問題集を広げて勉強する。最新の新着雑誌を目ざとく見つけて、ソファでゆったり眺める。ノートパソコンを図書館貸出デスクからIDカードと引き換えに借り出して、テーブルに置いた図書やノート、プリント類も見ながら、プレゼンテーションの準備をする。生徒の年齢も、4歳の幼稚園から18歳の高校3年まで、さらには、保護者や先生方も、それぞれの必要に応じて、自由に利用されています。

SOISには、全部で700名しか生徒はいないのですが、14学年の年齢差と、英語・日本語の2つの言語を始めとして、各国語とその行動パターンが違う人たちが集っていて、図書館の席は100席、



生徒が自由に使えるPCも39台しかないため、お互いの思いやり、他の人や勉強へのリスペクトがとりわけ必要になる場所です。読書や勉強がはかどるスペース、お互いに文化が違って、気持ちよく過ごせる場所になるように、そして、幼い子どもたちの良き先輩として、あこがれの対象となるように、ぜひ、自らの日々の立ち居振る舞いを洗練させてください。



## <Sports> AISA バレーボール優勝

川畑友実

SIS12年

今年のhigh school girls volleyball のチームは全体として若いメンバーが多く、ゲームの経験が少ない人が多かったです。AISAトーナメントの前にあった2つのトーナメントではどちらも2位となかなか悔しい結果が多かったです。なので、今回のAISAトーナメントはメンバー全員が優勝を目指して頑張ろうという気持ちでした。

AISAのトーナメントは韓国のKISであり、1日目は2ゲームありました。このトーナメントでは1試合5セットあり、先に3セット取った方が勝つ、というシステムでした。なので、今回は集中力がとても必要になってくるものでした。

最初の試合は慣れないコート、ボール、対戦相手など苦勞する事が多く、なかなか苦戦した試合でしたが、なんとか粘って勝つことが出来ました。その後は自分達のリズムがつかめて来たので、調子良く1日目は2ゲーム勝ちました。

2日目の最初の試合はなんと私たちSABERSのメンバーをホストしてくれていたバディーがいるKISとの対戦でした。勝てば決勝にいける試合だったので、全員このゲームで勝つ気はとてもありました。私たちSOISの1日目の試合を全て応援して、またお世話になっていたチームだったので、対戦するのは複雑な気持ちでしたが、全力で戦いました。結果、ゲームに勝ったので望んでいた決勝に行くことが出来ました。

決勝はWJAATーナメントでも対戦したYISで、この前の試合では苦戦した相手でした。私たちはYISが簡単には勝てないチーム



だと分かっていたので、気合十分で試合に臨みました。1、2セット目は競りましたが、なんとか勝つことが出来ました。3セット目に最後の最後で相手に逆転されてしまいました。ここで、私たちは4セット目では粘って拾い負けしない、という強い気持ちを持って対戦しました。なかなか長いラリーが続く中、あきらめずに粘り強く私たちはプレーし、ついに4セット目で勝ち、優勝することが出来ました。これまで2位止まりの結果だった私たちはとてもうれしく、コートで長い間うれしくて抱き合っ泣いていました。私はこんなにも優勝するのは感動することなんだ、と実感し、皆と一緒に優勝を喜んでいました。

(次ページ★に続く)

## <卒業生短信> タッチラグビーワールドカップに出場

安積広晃

SIS第13期卒業生

みなさん、こんにちは。2006年卒業第13期生の安積広晃です。今の12年生とはギリギリかぶってないですが、この場を借りて報告します。2011年6月22日～26日にスコットランドで開催されたタッチラグビーの第7回ワールドカップに日本代表として参加してきました。日本からは男子の部、女子の部、30歳以上、35歳以上と4部門にエントリーし、私は男子の部に初めて参加しました。結果は惜しくも16チーム中4位でしたが、貴重な体験をしてきました。今大会は総勢27ヶ国が参加し、過去最大のワールドカップでした。ちなみに4年後はオーストラリアなのでみなさん挑戦してみてくださいはでしょうか？(笑)ちなみに、2003年の第5回ワールドカップは、実は日本で開催されたんですよ。後、余談ですが、実はSISの先生にも元タッチラグビー日本代表がいるんですよ！以上、報告でした！



後列左から3番目が私です

## <Sports> AISA Boys Volleyball in Seoul, Korea

Hideto Fukuchi

OIS Gr.12

Our team started off with less than 8 players and looked depressing. The key players had graduated and we had only a couple of experienced players left in our team and at that time, 1 player that had just come up to high school. I love the sport volleyball and never gave up on building the team, to even make it exist, but at that point, I was starting to lose hope with teachers telling me that I should maybe consider giving up and forgetting about volleyball. Still, life without volleyball was like losing something very valuable and something hitting me right across the face and I couldn't give up. So I did everything I could to make volleyball happen and not just fade away. Eventually, it worked out with the bare minimum of 10 players, half beginners who had never played volleyball. Since we did not have a coach and only supervisors, Inoue Sensei and Majima Sensei, who kindly supported us by coming to all practices, we were a team that was not actually coached and had to do everything and develop as a team for ourselves. As the season moved on, we became better in skills and looked more like a team. We had a few losses but still a lot of wins to teams that were coached and with players that were mostly seniors and with a lot of experience. Then AISA came and we were nervous, excited and ready all at the same time.

Our first game in Korea was with our rivals since AISA volleyball started, SIS (Seoul International School) where we were hosted as homestays. They were expecting us to win but on our 5th set, we lost barely leaving us with one loss and a bad start. With the rules a bit different and 3 times as strict, it was very difficult for us to adapt to. Yet, our next game, we were beating the other team drastically and we could hear them on the other side being scared and losing confidence. They were literally sitting on the gym floor with hopeless faces and had given up, half way through the game. This gave us a lot of confidence and we improved so much with our skills since our first game while adapting to the new rules. Our third game was with



one of the strongest team, which they were called "The Beasts" by the Korean teams. We pounded them and took away their confidence while making us look invincible in the tournament. We made it easily to the championships and fought against one of the teams that were said to be weaker. We somewhat easily took two sets out of five and just had to win one more in order to get an automatic win but a couple of mistakes from our side lead to our loss and we figured that it was nothing to worry about and just had to win the next, fourth set. The fourth set, we were exhausted, yet took the game to the match point but a mistake I should have not done as a captain by tipping the ball and not spiking it when I could have, lead to the teams loss on our precious fourth set. On our final set, we were extremely tired and some of our legs were shaking from the game lasting for more than 2 hours when usually only lasts an hour or less. We were all praying to win the last set especially after hearing that the girls had become champions. We did our best on court and never gave up but for our team to be more of a attacking team and not a defending team, and for the other team to be a strong defending team, our misses on court shifted the game for us to lose at the very end with us only a couple points behind. The

(次ページ★に続く)

(★前ページの続き)

最後にバンケットがあり、トーナメントの結果発表、そして表彰式がありました。私たちSABERSは優勝の表彰をもらいました。また、今回はスポーツマンシップの賞もあり、SABERSが表彰されました。まさかの結果発表でメンバー全員喜び、他のチームも称賛してくれました。私は今回、決勝で戦ったYISもずっとSABERSを応援してくれたKISのチームも含めて友好的なチームが多く、良いライバルであったと思います。また、いつもSABERSの試合が始まる前の応援ソングでいつも通りチームはもちろん周りのチームの気持ちも高まり、その雰囲気を作ってくれた全てのチームやメ

ンバーのみんなに感謝したいと思います。

今シーズンの私たち、high school girls volleyballは去年とメンバーが大きく変わり、たくさんの練習試合、トーナメントでたくさん悔しい思いをし、多くの反省をして来ました。今回のAISAトーナメントはその私たちのこれまでの反省を生かし、成長した分の結果だと私は思うので、この結果は誇りにしたいと思います。私たちチームを支えてくれたコーチや、先生方、ずっと応援してくれ、このトーナメントに私たちプレーヤーを快く見送ってくれたSABERSのメンバー達に感謝したいと思います。皆さん色々なサポートありがとうございました。

## <Sports> AISA TENNIS – 22 Oct-25 Oct

Derek Entwistle and Rebecca Woodhouse

*Tennis Coach*

We had 14 students this year representing SOIS in the annual AISA Tennis Tournament which we were honored to host here in Osaka. The students all represented their school superbly and demonstrated great teamwork, determination and true SOIS Sabers spirit.

The Boys team played hard which gained them some good results from some extremely tough opposition. They were complimented by the other coaches on their 'hustle' and 'fight for every point' attitude. Recognition goes to singles players Sean Baxter and Kazuki Kobayashi, both still only in grade 9, who managed to hold their own against some strong and experienced opposition. Both athletes have a bright sporting future ahead of them.

The girls team this year was also made up of several young players, but you would not have noticed from the quality of tennis which was witnessed. Recognition must go to Haruna Ogata and Mirai Mizuno (both in grade 9) who after a nail biting final went on to win the AISA Girls Doubles Championship 8-6. SOIS were also fortunate enough to find ourselves in the situation of having to watch 2 of our singles players playing against each other in the Girls Singles AISA Championship Final. Kana Yokoyama (grade 9) and Kyoka Kitagawa (grade 10) both played well, but Kana kept up her consistently high standard of play and proved just too strong and went on to win the championship title and Kyoka placed second.

The SOIS Girls Team dominated throughout the tournament



from start to finish, with all team members working hard to add points to their total. As a result of this the girls went on to convincingly winning the girls team title.

Special player recognition must go Kana Yokoyama, who although still only in Grade 9 was untouchable in the Girls Singles Tournament. She kept up her high level of skill and professionalism in every game which meant that she only conceded 1 game in the entire tournament. There is a bright tennis future ahead for Kana, well done.

With such a young team this year, we as coaches look forward to the next tennis year where hopefully with such strong potential and great attitudes we will move onwards and upward to success.

(★前ページの続き)

game ended and we walked to shake hands with the other players. I heard my guys crying behind me and I couldn't hold my tears back and we all cried together from the mixed emotions from the game and the memories from when we were just a little team.

After the game had ended and we cleaned ourselves up, we ate and went back home to our homestays. This may sound like it was a depressing trip and a sad story but it was more of the complete opposite. In fact, to me, it was the best trip I have ever had in my entire life. The volleyball team grew from a little, depressing, weak team to having 3 all-stars and got our second place medal AND without even a coach! At the end, we were all like family and never wandered off in groups in Korea and stuck around with each other and enjoyed every minute of our time in Korea. I had never become as close to a sport team as this volleyball team and never cried for my team, never. Never

thought that I was going to have the best trip in just 4 days and was the best experience I had. It made me stronger in the inside and I will never, forget this trip and the small volleyball team we had. Thank you, Onishi Ryosuke, Sakashita Yujin, Ishimoto Kohsei, Kayashima Satoshi, Winston Shin, Miyamoto Rintaro, Kishigami Yusuke, Min-joon Choi and Fujimi Yousuke. Also I'd like to thank Inoue Sensei and Majima Sensei for always coming to practice when it must have been very hard to cram your schedule even more than what you had had already and to support us the whole season. Also thank you managers for coming to practice and help our practices run smoother, when we all stank like crazy and cheering so much for us at our games. Thank you everybody for making volleyball happen and for giving me a memory that I will keep forever in my life. This was our small little story and the things that happened in our AISA tournament.

## <Sports> 当キャンパスで千里国際アクアスロン開催

馬場博史 Hiroshi Baba

チェニー タラ Tara Cheney

Triathlon/Running Club Coach

千里国際アクアスロン@SOIS

9月4日に開催予定だった吹田市長杯トライアスロン大会が台風のため中止になったとき、「延期はないのですか」という声を多数の人から聞きました。残念ながら延期はありませんでしたが、「その代わりになる大会を小さくてもいいから開催したい」という思いからこの大会が実現しました。関西学院千里国際キャンパスを会場として初めて開催した大会です。

Aquathlon@SOIS was held here at SOIS on October 10th. In total 25 people of SOIS participated and 12 people placed out of 120 entries. [Gr.1-2: Swim 50m & Run 600m, Gr.3-6: Swim 100m & Run 1200m, Gr.7 & Up: Swim 500m & Run 3km]

<Placed> Gr.1 Boys: 1st Harry Cheney チェニー ハリー(OIS1), Gr.7-9 Boys: 1st Shimon Iwazawa 岩澤史文(SIS7), 3rd Shotaro Maesato 前里奨太朗(SIS8), Girls: 1st Arisa Mizuno 水野ありさ(OIS9), 2nd Mirai Mizuno 水野みらい(OIS9), Gr.10-12 Boys: 1st Riku Hosoi 細井陸(SIS10), 2nd Masato Fukuda 福田将人(SIS10), 3rd Joel Terhune ターヒューン ジョール(SIS10), Girls: 1st Yui Maeda 前田優衣(SIS11), 2nd Marika Fujisaki 藤崎麻理香(SIS10), 3rd Naomi Iwazawa 岩澤直美(SIS10), Age 40 & Up Women: 1st Tara Cheney チェニー タラ (Faculty)

<Other Finishers> 8 students and Chieko Ishii 石井智恵子(Faculty), Hisashi Munemasa 宗正久志(Faculty), Peter Heimer ハイマー ピーター(Faculty), Kazuhiro Iwazawa 岩澤和宏(Parent), John Searle サール ジョン(Faculty)

<他の大会結果>

■7/31(日)アクアスロン京都大会で1名入賞

Aquathlon Kyoto was held on Sunday, July 31 at Kyoto Aquarena in Kyoto city. In total 8 people finished each distance and one student placed.

<Placed> Gr.10-12 (Swim 400m + Run 3km) Boys 2nd 細井陸 Riku Hosoi (SIS10)

<Other Finishers> Gr.7-9 (Swim 300m + Run 2km) Boys 米永亘佑 Kosuke Yonenaga (SIS7), Gr.10-12 Girls 藤崎麻理香 Marika Fujisaki (SIS10), 前田優衣 Yui Maeda (SIS11), Gr.10-12 Boys ターヒューン ジョール Joel Terhune (SIS10), 吉形優樹 Yuki Yoshigata (SIS10), Adults (Swim 1000m + Run 6km) チェニー タラ Tara Cheney (Faculty), 馬場博史 Hiroshi Baba (Faculty)

■8/21-23夏合宿で3名が21km完走

From Sunday to Tuesday, August 21-23, we had summer training camp in Hakui city, Ishikawa prefecture. We trained cycling, running and swimming at the National Noto Youth Friendship Centre 国立能登青少年交流の家. The three students, Masato Fukuda 福田将人, Riku Hosoi 細井陸 and Marika Fujisaki 藤崎麻理香 (all SIS10) finished 21 km, the same as a half marathon in a long distance running challenge, on the second day. Many of the other 16 students also finished their



longest distance ever.

■9/11潮芦屋アクアスロンで2名入賞

Shio-Ashiya Aquathlon was held at Ashiya Sogo Koen in Ashiya city, Hyogo prefecture on September 11. In total, 11 people of SOIS participated and 2 students placed.

<Placed> Gr.7-9 (Swim 250m + Run 3km) : Girls 2nd 水野ありさ Alisa Mizuno (OIS9), Boys 3rd 前里奨太朗 Shotaro Maesato (SIS8)

<Other Finishers> Gr.10-Adults (Swim 1000m + Run 10km) : 藤崎麻理香 Marika Fujisaki, 福田将人 Masato Fukuda, 細井陸 Riku Hosoi, 浦雄貴 Yuki Ura, 吉形優樹 Yuki Yoshigata (the above-mentioned are SIS10), 前田優衣 Yui Maeda (SIS11), チェニー タラ Tara Cheney (Faculty)

Relay (Swim 500m & Run 5km) : 岩澤直美 Naomi Iwazawa & 藤倉諒子 Ryoko Fujikura (the above-mentioned are SIS10)

■10/15関東ファイナルクロスカントリーで1名入賞

Kanto Finals / Invitational Cross Country was held at Tama Hills in Tama city, Tokyo on October 15th. This is the biggest cross country race mainly for international schools in Kanto area. In total 8 students of SOIS participated and Marika Fujisaki 藤崎麻理香(SIS10) came 2nd out of 75 varsity runners.

<Other Finishers> Girls 3.3km: Ryoko Fujikura 藤倉諒子(SIS10), Megumi Takada 高田恵実(SIS11), Alisa Pelz ヘルズアリサ(OIS8), Boys 4.4km: Masato Fukuda 福田将人(SIS10), Yuki Yoshigata 吉形優樹(SIS10), Yoshihisa Iwama 岩間義尚(SIS8), Shotaro Maesato 前里奨太朗(SIS8)

■10/23吹田市長杯陸上競技大会で6名入賞

Suita Track & Field Meet was held at Suita-shi Sogo Undojo on October 23rd. In total 13 people of SOIS participated and 6 people placed.

<Placed> Gr.10-12 Boys 5000m 1st Masato Fukuda 福田将人(SIS10), 2nd Riku Hosoi 細井陸(SIS10), 3rd Yuki Yoshigata 吉形優樹(SIS10), 1500m 3rd Riku Hosoi 細井陸(SIS10) Men 5000m 1st & 1500m 1st Syunya Maeda 前田隼矢(KG) Women 5000m 1st Tomoko Yonenaga 米永知子(Parent) Men Age50-59 3000m 1st Hiroshi Baba 馬場博史(Faculty)

## <SIS保護者会> ホームページをご覧ください



<http://www.sispa.jp/>

SISの保護者会ってどんなことをしているの？ 役員にでもならないと、なかなか実感できませんよね。そんな保護者会の活動がひとめでわかるのがSISPAホームページです。

### あなたの知りたいをかなえる記事が満載

保護者向け行事やボランティアに参加したい！

- ・BD(執行部)担当の講演会の報告、定例会や保護者会総会の議事録
- ・HP(ホスピタリティー委員会)担当のバンケットサービス、ティーサービスの様子
- ・IF(インターナショナルフェア委員会)担当のインターナショナルフェアの様子

懇親会や親睦会に出席できなかったけれど内容が知りたい！

- ・NW(ネットワーク委員会)担当の学年懇親会のお知らせ&報告、地域親睦会の報告

学校行事の様子を知りたい！

- ・PR(広報委員会)が取材した学校行事のレポートや特集記事  
PRが各委員会と協力して、ホームページの記事を掲載しています。写真やスライドショーも満載なので、学校行事の様子もわかりますよ！

### 読まなきゃ損！！(最新記事とこれからの掲載予定)

- ・東北震災ボランティアレポート
- ・ヨーガセラピー講習会報告(BD)
- ・AISA男女テニス バンケットサービス(HP)
- ・スポーツダイレポート
- ・インターナショナルフェア(IF)
- ・高等部ホリデイコンサート ティーサービス(HP)
- ・第2回地域親睦会報告(NW)

などなど多彩な記事を掲載しますので、ぜひご覧ください！

### 他にはこんなこともできます

- ・webアンケート

選択式と自由記述式で、ホームページ上でアンケートをとることができます。アンケートのサンプルはトップページからご覧いただけます。

### ・同好会案内

保護者サークルの活動案内を掲載できます。同好会サイトへのリンクも可能です。

お問い合わせ・ご相談はお気軽にPR(pr2011@live.jp)まで！

### 🔑 ログインの仕方がわかりません

①<http://www.sispa.jp/>を開くと画面右側にログインフォームがあります。

②ユーザー名はファミリーIDです。

③最初にログインするときのパスワードは、入学時に配布された仮パスワードです。

### 🔑 パスワードを忘れてしまいました

①アカウントに登録したEメールアドレスがわかる場合

ログインフォームのパスワードを忘れましたか？をクリックして、Eメールアドレスを送信するとパスワードの再設定ができます。

②Eメールアドレスがわからない場合

ホームページ左下のお問い合わせより「ログインに関する問い合わせ」フォームを送信してください。PRから仮パスワードをご連絡します。

## インターナショナルフェア

フェアで秋の楽しい1日を過ごしませんか？

SOISの20周年をお祝いしましょう

11月19日(土) 10:30~15:00

バスの運行など、詳しくは [www.sispa.jp](http://www.sispa.jp)

お車でのご来校はご遠慮ください



### 編集後記

いつもはランニングやトライアスロンの大会に引率したり、時には出場したり、時にはボランティアスタッフをしたりしていますが、大会主催者の立場になったのは初めてでした(P.39)。計画、準備、当日の運営と大変でしたが、やり遂げてみると自分が出場して完走した時の達成感に近いものを感じました。できればまた来年も開催できればと思っています。大会に出場してくださった方々、準備や運営を手伝ってくださった方々に心から感謝しています。ありがとうございました。(馬場博史)

INTERCULTURE ◆Editor: Hiroshi Baba ◆Proofreader: Keiji Majima, Stephen Frater